

許嫁拾いました

彰吏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校のあれやこれがすべて終わり

俺こと比企谷八幡は

千葉とは離れ

私立大学へ通いながら一人暮らしを始めた。

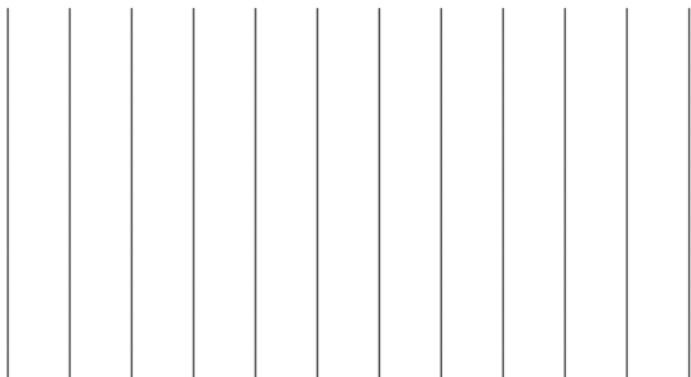
1年が過ぎ大学2年の春休みの話である。

そこである女の子と出会うことになる。

目

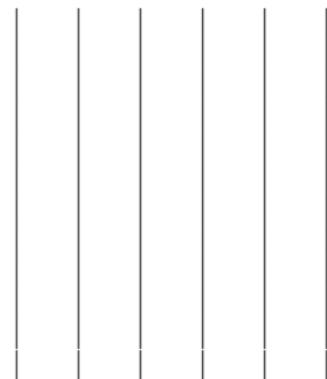
次

第12話 第11話 第10話 第9話 第8話 第7話 第6話 第5話 第4話 第3話 第2話 第1話



135 120 95 77 61 54 43 33 27 20 15 1

第18話 第17話 第16話 第15話 第14話 第13話



223 211 201 193 174 154

第1話

「はあ、ちゃんと確認しとくんだつた」

なんともしようもないつぶやきが漏れてしまつた。独り言みたいで恥ずかしいなと思ひ、周囲に誰もいないか確認してしまつた。こんなことで、不審者と間違えられて通報とかさすがに笑えない。日付をまたぐかまたがないかぐらいの時間だから、通報されたら1発で逮捕間違いなしだな。確認している時点で怪しさましましであることは目を背けさせてもらう。

それについてマツカン愛好者の俺がマツカンのストックがないことに気づかないなんて、やつぱり一人暮らしを始めたのが間違えだつたか。

小町が恋しいよ。恋し過ぎて毎日電話しちやつて避けられるまである。俺には未来予知の能力があつたのか。これで黒トリガーとぼんち揚持つてたら近界民と戦えそうだな。

そんな馬鹿なことを考えながら歩いていると目の前で人が倒れていた。
えつ、ちよつ、待つて。唐突過ぎませんかね!!

いや、この時間帯なら有り得るか。こんな時間に人が倒れてるとか酔っぱらいの確率が高すぎる。つい先日残念なもと恩師（未婚）の介抱で痛い目にあつたのに（精神的に）連チャンはちょっとなあ。遠慮したいよな。

近くまで来て気付いたが、女性やん。なんだろう、デジヤブかな？

だが、たまには善行を積んでもいいか。いいことすれば自分に返つてくるし。徳を積むことが世の中生きるうえで大事なことなのです。

「あのー、大丈夫ですか？」

「ZZZ…」

「うわっ、寝てるよ。おい、起きろ。こんな所で寝てたら風邪引くぞ」「ふにゅ」

可愛いな、おい。可愛いのはいいんだが起きねえ。起きない以上放置してもいいんだが、一度声掛けたのに無視するつてのも寝覚めが悪いんだよな。そうと決まれば近くの交番まで連れてきますかね。ここで自宅とか連れ込んだら犯罪だから気をつけような。お兄さんとの約束だぞ。

さて、この女性（美人さん）をおぶったのはいいが、この人着痩せするタイプだな。重

いわけじやないんだが、背中に当たる二つのメロン様がやばい。俺の精神的ヒットポイントをゴリゴリ削つてくる。毒とかで削れる感じを想像してくれればわかりやすいかも。この状況的には、精神に毒だしそこまで間違つたこと言つてないな。そしてそこに追い打ちをかけるように、耳元に聞こえる甘い寝息。これはもう、猛毒ですね。

無心だ、比企谷八幡。お前ならできる。そうだ、素数を数えよう。先人達はこれによつて無心になつたはずだ。そもそも素数ってなんだよ。数学とかなにそれ美味しいの？だから素数とか知らなかつた。テヘペロ。これ、自分でやつてるどこ想像したらキモイな。

なんてこと考えてたら交番の明かりが見えてきた。いちおうもう一回起こしてみるか。

「おい、起きろ。交番に着くから」

「う……うん……」

「起きたか！良かつた。俺も連れてきた経緯までは説明できるが、それ以前はわからんから自分で説明してもらつていいか？」

「あーハチ君だ。おはよう」

えーと……、はあ!?

「なんて?」

「もうどうしたのハチ君?あれ? そういえばなんで私抱っこされてるの?」

「路上で寝てたから声掛けたんだが、なかなか起きなかつたからそのままにしておくのもなんだし、そこに見えてる交番に連れてこうと思つてたんだよ」

「交番なんてやだよ。どうせだつたらハチ君の家がいいー」

「何言つてんだよ。このまま連れてくからな」

「で、誰もいないけどどうするの?」

「はい、そうです。交番に誰も居ませんでした。ちょうど見回りの時間だつたのか知らんが、普通誰か一人ぐらい残しておくだろ。」

「どうするの?ハチ君」

ニヤニヤしている女性を見てため息がでそうになるのを我慢する。ここまで来たらなるようになれだな。

「お前家の場所どこだ？送つていくよ」

置いていつてもいいけどそれでなんかあつたら嫌だしな。と言い訳を心の中でつぶやく。

「さすがハチ君優しいね。だけど、私の家ここからだと結構遠いよ。歩いたら1時間以上かかるけど、大丈夫？」

「えっ」

「だからさ、ハチ君の家に行こうって初めから言つてるじゃん」

このドヤ顔である。ドヤ顔でも可愛いつて一種の才能だな。

えっと、ホテルは：ここら辺は住宅街なせいで結構離れてる。

はあー、しようがない置いてくか。ここまでやつてやつたからいいだろう。そろそろ

別れ時だな。

「すまんが警察官来るまで「やだよ」なんでだよ」

俺が話してゐるのに被せるように言い放ちやがつたな。

「（）で待つていたつていつ警察官が帰つてくるかわからないし、明日授業が1限から
だから早く寝たいし。むしろもう寝る」

「わかつたわかつたよ、俺の負けだ。だが、聞きたいことがいくつかあるんだがいいか
？」

「いいけど。家に向かいながらでもいいかな？」

「わかつたよ。ほら」

「えつと」

「あ、そうか。もうおぶる必要ないな」

「えい」

「あぶねえ」

この人勝手におぶさつてきやがつた。思いつきり抱き着いてきたから二つのメロンが、メロンがああ。フウ……。

「さて行きますか。それで、まずは名前から聞いていいか？」

「今井圭萌いまい かほつていうんだ。よろしくね」

聞いたことあるような、ないような。うーん、どっちだつたかな? 思い出せん。そもそも名前覚えることがそこまで得意じやないんだよ。覚える人がそこまでいなかつたし。

「ああ、よろしくな。それでなんであんな所で寝てたんだ?」

「1人で飲んでたら悪酔いしちやつて。テヘツ」

「テヘツじやねえよ」

「ごめんなさい」

これは予想通りだが、そこの理由は言わないんだな。まあ、初対面の人に言うわけないか。こんなこと思つてるのは俺だけかもしけんが。

「そしてこれが1番大事なことなんだが、俺とどこかであつたことあるのか？」
「やつぱり忘れてるか、昔のことだしね。そのことについては、ハチ君の家に着いてからでいいかな？ここで話すことじやないしね」

込み入った話なのか。

やつぱり俺が何かしたんかな、この綺麗な人に。だけど、こんな綺麗な顔したサイドテールの黒髪の女性なんて知らないし会つたことすらないと思うんだけど。

「さつき1限があるみたいなこと言つてたけど大学生なのか？」

「そうだよ。2年で20歳なんだ」

俺と同じ学年で同じ年か。大学の知り合いは全くいないし、高校でもいない。となるとさらに昔つてことになるのか。

小中学校は思い出したくないな、黒歴史満載だし。むしろ黒歴史しかないまである。

「えいや」

「なつ」

この人変な掛け声（可愛い）をしたと思つたら、今まで以上に密着してきやがつた。何しやがる。メロン様がすごいことになつてゐるの言わづもがなんだが、それ以上にこの甘い匂いがやばいです。

「何するんだよ」

「ハチ君が怖い顔してたから。何か考へてるんだろうけど、やっぱ怖い顔はいやだからね。それに私が呼び掛けても反応しなかつたし」

「そうだつたのか。それは悪かつた。それでなんだよ」

「そこの駅のコインロッカーに行つてもらつてもいいかな？荷物が預けてあるんだ」

「なんだよ荷物つて。てか、コインロッカーに預けるつてことは大荷物なのか？俺にはこれ以上持てねえぞ」

「大丈夫。流石に降りるよ」

「それは何よりだ」

「ほら、着いたぞコインロッカー」

「ありがとう。荷物出すからそこで待つて」

言うが早いかすぐに取り出そうとする今井。おいおい、なんかデカいボストンバッグがでてきたんだけど。まさかな……そんなわけないよな。

「もういいよ。行く」

やつぱりそれ持つていくんすか今井さん。何はいつてんだよ。どこ行くつもりだつたんだよ、この人。

「はい」

「？あーはいはい」

なんで変な勘違いしたんだよ。やめろよ、顔熱くなるだろ。

それにそんなことされたら、勘違いして告白して玉碎からの黒歴史になるから。振られるの前提で黒歴史確定なのかよ。

「じゃあ行くぞ」

「う、うん」

そんなこんなでもうすぐ自宅に着くんだが、あれから会話が全くと言っていいほどない。それでも不思議なことに、全然嫌な感じにならないんだよな。ホント不思議だよな、初めて会つたはずなんだけどね。

「もうすぐ着くぞ」

「楽しみだなあ。ハチ君の部屋とか楽しみ過ぎてテンション上がるよ」

「なんでだよ。そんなワクワクしても何もないぞ。いやマジでびっくりすると思うぜ、何もなくて」

「ハチ君の部屋だからいいんだよ」

なんでこんなに可愛らしいことばつか言つてくるのかね。

さては、俺から金をむしり取ろうとしてるんじゃないの？なんかそう考えたら怪しさがマックスだよ。

そういうえば結局マツカン買ってねえじやん。そもそも俺がマツカンのストックを確認しておけばこんなことに。あー、やめよやめよ。そんなこと考えても今更だ。

「今から鍵開けるからちよつと待ててくれ」

「りよーかい」

「はいはい、あざといあざとい」

「あざとくないよ」

敬礼がとても可愛いかったです。ホントあざといバンザイ。だけど、思つたよりそんなにあざとさを感じないんだよな。

そんな事考えていたらいつも通りに解錠してたらしい。慣れって怖いね。

「ほらいいぞ」

「ヤツター」

「おい、待て廊下を走るな。そしてもう夜中なんだから騒ぐなよ」

そうなんですもう日付けも変わつて1時間がたつてます。こんな時間に騒いだら怒られること請け負いだからな。女の子を連れ込んで騒いでマンションから追い出されたとかホントに笑えない。確か冒頭の方で言つたけど、これ傍目から見たらマジで犯罪者だな。

そんな事考えながらリビングまで来てみると、2人掛けのソファーアに座つての今井が目に入つた。

「ほら」

「ん、あー、お水だね。ありがとう、やつぱりハチ君は気が利くね」

「たまたまだ」

本当の本当にたまたまだ。酔つてたから一応水飲んだほうがいいかなとか思つてないんだからね。自分でツンデレのまねやつといてなんだがドン引きだわ。

「それで話聞かせて貰えるんだよな」

「うんそうだつたね。実は私、今井圭萌は比企谷八幡の許嫁になりました」

第2話

何言つてんだこの人。まだ幼馴染とか言われたほうが、もしかしたら納得できるかも
しれん。ごめん嘘ついた、どつちにしても納得できないわ。

「ううん、これは驚いてるのか呆れられているのかイマイチわからないね。でも、ごめん
ね。さつきも言つたけど明日は大学に行かなくちやいけないから、お風呂借りてもいい
かな？」

「あ、ああ。いいけど、なんで明日大学に行くんだ？もう春休みのはずだろ」

とりあえず許嫁の件はおいておこう、考えるだけでアタマが痛くなりそうだ。それに
長期休みを謳歌している身としては、もう春休みなのになんで大学行くのか気にならな
いわけでもないしな。

「確かに普通なら春休みなんだけどね。私は資格を取るために講座を受けてるんだ。短
期講座っていうんだつけな」

なるほどな、資格試験のための短期講座。それを春休みの始めの時期にやるつてわけか。普通の登校日は講義があつてできないし、イメージ的には短期で一気にやる特訓みたいなものか。少し話が変わるけど、よく漫画にある短期特訓って凄いよな。絶対俺だつたら死ねる。むしろ、やる前に逃げてそのまま引きこもるまである。

「それは大変だな、俺なら確実に逃げ出してる」

「ハチ君ならそう言うと思ったよ。それも明日で終わりなんだけどね。あ、そうだ。明日15時頃終わるからさ、その後一緒に買い物行こうよ。駅前のららぽーとでいいよね」

「なんで見ず知らずの女性とそんな事しなくちやいけないんですかね？」

なんで自分の部屋の中で、ナンパみたいなことされてるの俺は。それもこんな美人に。普通逆だろ。逆でも、ないわ。俺にそんな軟派などころはない。

それにこんな下手な清楚系アイドルよりも綺麗な人と一緒に買い物なんてしてみる。俺の大事な胃に穴が開いて、もれなく胃潰瘍になる。てか、一緒に歩いただけでなる自信がある。胃薬買わなくちゃ（使命感）

「そんな事言わないでよ。悲しいなう。それにどうせ朝方にハチ君のお父さんに確認するんでしょ。それで私に聞きたいことが増えて、結局来ることになるよ」

なんで俺の行動読めるんだよ。エスパーかなにかかよ。

「それは、その時にならなくちゃわからんだろう」

「まあ、いいよ。それでお風呂は入つていいかな？」

「いいけど着替えとかどうするだ？」

「持つてきてる決まってるじやん、それだよ」

今井が元気よく指さしたのはあのボストンバッグである。どうやらあれに着替えやらが入っていたらしい。だからなのだろう、あのボストンバッグは結構な重さだった。それにしても重すぎるような気もするが。どれだけ物が入つているのやら。

「お、私のボストンバッグが気になつてゐるのかな？·もうしやうがないなあ、ハチ君つたら

「いや、気になつてないし別に広げなくていいぞ」

俺の肩をバシバシ叩きながらニヤニヤするな。面白そうな反応するなどか思つてそ
うだな。

さつきから本当になぜ心の中が読まれてるのか気になるけど、あの友達の家に泊まり
に来ました感満載のボストンバッグは気になるよな。友達の家に泊まりに行つたこと
ないし、泊めたことないからライマイチ分からないからなおさらだ。別に中身の事じやな
くて、それが本当に元から泊まるつもりのものなのかどうかをだ。

「まさか元からここに泊まるつもりだつたとかじやないよな？」
「あつたりく、よくわかつたね」

いやー、いい笑顔だなー（遠い目）

マジでアタマが痛くなつてきた。雪ノ下がよくやつていたアタマイターのポーズを
俺がすることになるなんてな。ああ、雪ノ下元氣かねえ（現実逃避）

「じゃあ、先にお風呂入つてくるからね。あ、覗いてもいいけど流石に明日に響くから夜

戦はなしだよ！」

「覗かねえし、夜戦もしねえよ。てか、両方とも今までしたことない。そして女性がそんな事言うもんじやねえ」

ホントなんなのこの子。言つてすぐに走つていったからいいものの一瞬想像しちゃつたじゃん。

このあと、身体冷えたから風呂に入ろうと思つていたのに入りにくさがあがつたよ。ただでさえ妹以外の女性、というか他人を初めて家に入れて緊張してるので、風呂とか無理すぎる。

だけど、すげえ疲れたからできれば入りたいんだよな。どうしようかね。

第3話

「お風呂いいよ」

「／＼＼＼＼お、おうわかつた」

「どうしたの？顔、赤いけど。ああ、なるほど。そうゆうことね」

「ニヤニヤするな」

風呂上りの上気した顔とか、小町以外の女性のパジャマ姿を初めて見たとか、今までまとめていた髪がほどかれて下ろした姿とか、一気に多方面からのダメージは想像以上のものだつた。

それに俺の家のシャンプーとリンス、ボディーソープを使つてるはずなのに、なんでこんな甘い匂いがするんだよ。やめて、八幡のライフはもうゼロよ。

「どう？」

「なにがだ？」

「もう、わかつてゐるくせに。パジャマ、似合つてゐるかな？」

「そこそこかな」

「ありがとう」

ありがとうつてのも意味わからないが、それよりもその後の花が咲くような笑顔が
もつと意味わからん。まあ、可愛いからいいけど。

「そういえば、私はどこで寝ればいいの?」

「そうだなー。客人用の布団とかはないし、悪いが普段俺の使ってるベットでもいいか
?」

「ほんとに? ヤツター」

いや、なんで喜んでるんだよ。それにいくらなんでも喜び過ぎだろ。普通なら嫌がる
だろ、てか嫌がれよ女性として。

「添い寝だ添い寝だ♪」

「何リズミカルにとんでもないこと言つてるんですかね?」

「既成事実?」

「もつととんでもないことを言うな」

「これは流石に聞き逃せなかつた俺である。添い寝だと？既成事実だと？死ぬは、いろんな意味で。」

「えつ？だつて私がハチ君のベット使うつてことはハチ君と一緒に寝れるつてことじやないの？」

「なんでこんなにウキウキした顔で聞いてくるんですかね？俺がおかしいのか？いや、違うよな。」

「どんな思考回路してんだよ。そんなことになるわけないだろ」

「えー、じゃあハチ君どこで寝るの？」

「このソファーアーに決まつてんだろ」

俺は座つているソファーアーを叩きながら言つた。普通に考えたらこうするよな、今井がおかしいだけで俺は正常なはずだ。

なんかあれだけ自信満々に言い切られると、自信がなくなるんだけど。

「ダメだよ、そんな所で寝たら。身体中痛くなるし寝違えたりもするはずだよ。そもそも、疲れがとれないと思う」

「大丈夫だ。ソファーで寝るのは慣れてるし、もう春休みになってるおかげでそこまで疲れてないからな」

そもそも今井と添い寝とか俺が確実に寝れない。寝れない以上にいろいろとやばい。そつちの方が余程まずいと思うんだけど。既成事実とかマジで笑い事にならなくなる。笑ってないけど。

「わかったよ、しようがない今度は私が折れる番だね」

「わかってくれてうれしいよ」

良かつた、今井が理解してくれて。これから地獄（予想）の入浴が待ってるのに、その後にも地獄（確実）の添い寝とかほんとに勘弁してほしい。

「それにしても一人暮らしの部屋にしては広いよね」「確かにな。俺もこの部屋を借りた時から思つてるよ」

引っ越しした時は親父が用意してくれた部屋に、おふくろの用意してくれた家具があつたから、自分では全く準備しなかつたんだがな。当時はなんとも思つてなかつたが、なんでこんなに用意してくれたのか今更ながらすごい謎なんだよな。謎過ぎて不気味さとか感じる。

用意してもらつた手前特に何も言わなかつたけど、どの家具も一人用にしてはやけに大きいんだよな。部屋自体が広いから良いんだけど、もう少し小さくても良かつたんじゃないのかね。

そしてこんな部屋を準備するお金はどこから出したのかが1番の謎だな。触れるの怖くて聞いてないけど。

「俺は風呂に入るから、お前は寝ていいぞ」

「ラジヤー」

「いや、あざといから」

「おやすみ」

「お、おやすみなさい」

最後の一言と笑顔が素敵でしたまる。

「ふう」

夜中の2時過ぎに風呂に入るなんて初めてかもな。とても新鮮な気持ちになる。冷えた身体も温まつてやつと一息つて感じだな。ただ、この甘い匂いがなければだけど。
ここまで来るのに苦労しただけでなく、お湯に浸かるだけでさらに精神的にダメージを当てるなんて、今井は精神の暗殺者(メンタルアサシン)になれるんじやないか。

特にやばかったのは脱衣場だ。今井さんは何を思つたのか下着とかも普通に洗濯ListGroupの中に入れていたので、ものすごく目に入つてきてやばかった。きっと素でやつてゐから、タチが悪い。俺の鉄の理性のおかげで何も起こらなかつたけど、一つだけ報告しておこう。めっちゃ大きかつたんやで。

そろそろ真面目に明日のことを考えようかな。

明日は土曜日で親父も平日よりは朝が遅いはずだから、朝方まで起きて電話してみよ

うかな。

そうしないと信じられないし真実が見えてこない。ついでにこの部屋とか家具につ
いても聞いてみますかね。

あ、そういうえばマツカン・・・・・・

第4話

「うん」

バキッ、ボキッと固まつてた関節がいい音でなつた。

久しぶりにソファード寝たけど思つていたよりしつかり寝れたな。自分で気づか
ないうちに疲れがたまつっていたのかな。

「あ、マツカンマツカン」

やつぱり寝て起きたらマツカン飲まなくちゃね。俺のこの寝起きの飲みっぷりなら、
C M のオファーがきてもおかしくないんだけどな。こられても誰だよこいつつてなる
からやんないけど。誰だかわかるならやるのかよとかつこまないでね。

「お、あつたあつた」

マジでうまい。これを生んだ千葉は偉大だな。I LOVE マツカン、I LOV
E 千葉と叫びたくなるけど、お隣さんに迷惑になるからやらない。

ちょっと待て、何故マツカンがあるんだよ。普通にいつもの習慣で飲んだけどおかしいだろ。

まあ、本当のところ実はもう正解を知ってるんだけどな。わざわざ冷蔵庫に貼らんでもいいのに…。

「わざわざ置き手紙ね。えーとなになに『昨夜は突然なのに泊めてくれてありがとう。やつぱりハチ君は優しいよね。一旦家に帰るので、合鍵を借りて施錠しておきます。泊めてくれたお礼といつてはなんだけど、朝ごはんにサンドイッチを作つてみました。冷蔵庫に入つてるので食べてくださいね。それとマツカンを買えなかつたと言つていたので買っておきました。あと約束の件忘れないでね。P. S. 電話番号とメールアドレスを裏に書いてあるので、登録してくれたら嬉しいです』うーん、なるほどなるほど。確かに帰りにマツカン買えなかつたことを喋つたな」

P. S. についてはあるて触れない方向性でいこうかな。

それにしても昨日遅かつたのに、朝早く起きてマツカンを買ってきて、なおかつ朝ごはんまで作ってくれるとか普通に申し訳ないな。

「もう7時か、先に親父に連絡してから朝ごはんかな」

親父に連絡するのも久しぶりだな。基本的に家族だと小町以外に連絡しないからな。

『もしもし』

「もしもし、親父か」

『ああ、八幡か。おはよう、こんな時間になんだ? 昨日の報告とか別にいらんぞ』

「何言つてるんだよ、昨日とか何もなかつたぞ」

『はあ? お前こそ何言つてやがる。昨日は圭萌ちゃんと久しぶりに会つて、そのまま食事だろ』

「はつ?」

全く覚えがないんだが……。

そんな予定はもとからなかつたし、昨日の午後から夜にかけてバイトに行つていたし

な。その後は美人（今井）を拾つたぐらいなんだが……。

まさか、あいつの1人で呑んでたって本当は俺と呑む予定だつたてことか？ははつ、まさかな。そんなわけないだろ。嘘だろ、そんな様子全くなかったと思つたが。

『お前に俺からメールした筈なんだが送られてないか？』

「いや、きてねえよ』

『なに！ ちよつと待て確認するから。あつ、ごめん送信ミスつてた』

「このクソ親父何してやがる』

『本当にすまん。お前から返信がこなくておかしいとは思つていたんだが』

「ちゃんとその時に確認しろよ』

チツ、早くも今井に聞きたいことができちまつたよ。

『それでじやあ要件はなんだよ？』

「その今井についてなんだが

』

それから昨夜のことを搔い摘んで説明した。

『なるほどな。それで、俺に許嫁のことを確認をしたくて電話したつてことか』

「ああ」

『その件は事実だぞ』

「やつぱりそうなのか。だが、俺に選択肢を与えずに決めるなんてとんでもないな」

『何言つてやがる、お前も了承したはずだぞ』

「はつ？」

全く覚えがないんですが、それは。

『その様子だと覚えてない感じだな。しそうがねえな、俺の覚えてる範囲で話してやるよ。何故お前とあの可愛い圭萌ちゃんが許嫁になつたかを』

「なるほどな。思い出したよ。確かに今井は俺の許嫁らしいな」

『思い出して何よりだ。それでどうするんだ?』

『今井が俺のことを嫌いでないなら俺から言う事なんてない』

『はつきり言えよ、バカ息子』

「ちつ、俺は今井のことが好きだよ」

『そうか、それなら良かつた。せいぜい頑張れよ、バカ息子よ。次に話す時は結婚の報告かな?』

「うるせえ。つて、切りやがった」

さて、朝ごはん食べながら親父の話で思い出した昔ばなしをしてみますかね。
ここからは回想だ。親父と俺の記憶による回想なのであしからず。

第5話

俺の通っていた小学校は、3年生から4年生に進級する時にクラス替えが行われる。3年間作り上げた人間関係を一度リセットして、新たな人間関係を作るのである。

俺はと/or/今でこそ、ボツチであるが、小学生の頃はグループを作るとかグループに属するとかはなかつたものの、それなりに話す人などがいたりした。わかりやすく言うと親友はいないが誰とでもそれなりに仲良くできる、そういうやつだったのだ。だから俺はクラス替えがあつたところで特に支障などなく、今までと変わらずやつていこうと思つていた。

初めて今井のことを知つたのは、そんなクラス替えをしてから初めての登校日のことだつた。

その当時から彼女は可愛い女の子だつた。

3年生まで他のクラスだつた俺でも、彼女の噂を耳にするぐらいには知られていた。綺麗な黒髪をゴムで結ぶことをせずに、その当時はストレートだつたがそれがまた良かつた。

余り言いたくないし、特に本人には絶対に言いたくないことだが、その当時の俺は一

目惚れをしたのだろう。

1年生の時から本を読んでいたせいか、この頃からそれなりに頭が良かつた、教養がそれなりにあつた俺はなんとなくわかつていて。あれだけ可愛い子なのだから俺なんて見向きもされないだろうということを。

俺の通っていた小学校では4月の中旬にオリエンテーションがあつた。オリエンテーション自体は新たなクラスメイト同士で仲良くなるためのもので、なんら不思議なところはないものだろう。

話題が変わるが今井の父親は外務官をやつているらしい。らしいと言うのは俺自身が今井や今井の父親から聞いた訳では無いからなのだが。外務官の仕事をよく知らないが、今井の父親は海外赴任をすることが多くあるらしい。

そして今井の母親も父親が海外に慣れるまで一緒にいて行くことがあつたらしい。娘である今井を祖父母に預けて。

話を戻そう。オリエンテーションなのだが、子供だけでなくその親同士の仲も良くなればと親子で参加するものであつた。

この当時、運悪く今井の父親が4月の頭から海外赴任が決まり、今井は祖父母の家に

預けられていた。そうすると今井はオリエンテーションの時どうなるだろうか？

『あいつ両親が来てないぜ』

『もしかして両親がいないのかしら』

このような会話が学生の間で行われていたのは想像に難しくないだろう。実際、俺も初めはなんで1人でいるのだろうとは思つた。だが、その当時の俺は深く考へることもせずにオリエンテーションを単純に楽しんだ。

その後、俺はクラスメイトと深く関わらずにいたので全く気づかなかつたが、どうやら今井はクラスメイトの中からハブられていたらしい。そのことに俺が気づいたのは5月に入つてからのことだつた。

その日の俺は日直だったのでめんどくさいと思いながらも、日直の仕事である花の水やりと学級日誌を職員室に取りに行くためいつもより早めに学校に来ていた。

俺が教室に一番乗りだらうなとか考えながら教室のドアを開けると、1人の女の子がちよこんと座つていた。この頃の俺は今と違つてそれなりに人と付き合つていたから、キヨドることなく普通に挨拶をしていた。

『おはよう』

『グス……、おはよう』

教室にいたのは今井だつた。今井がいた事にも驚いたが、それよりも泣いてることに心底驚いた。

『おい、どうした？なんで泣いてるんだ？』

『なんでもない』

そう言いながらも彼女は、目にいっぱいの涙をためていた。

『なんでもなくはないだろ。どうしたんだよ、俺でよかつたらなんでも聞くよ』

俺は好きな女の子が泣いていたからきつと必死だつたんだろう。俺は無謀にも彼女を助けようと思つてしまつた。

『ダメだよ、私に話しかけたら比企谷くんまで無視されちゃうよ』

『どうゆうことだ？』

『私みんなから無視されるし話しかけてもらえないくて、それでさつきまでいたクラスメイトにどうして？って聞いたらそれでも無視されて』

その時俺は初めて自分のアホさ加減にイラついた。なぜ俺は好きな子がいじめられてるのに気づくことができなかつたのか。この時ほど後悔したこととはたぶん今までないと思う。

『あら、比企谷くんおはよう。なにしてるの1人で』

ああ、そういうことか。この一言どこの女の子の表情で俺は全てを理解した。こいつ

が元凶なのだろう、と。そして今井が言つていた無視する理由を聞いたのもこいつなのだろう、と。それと同時にこいつは遠くない未来にまた同じことを繰り返すのだろうとも思つてもいた。

俺は小学3年生のときにもいじめを見つけて、その元凶となつていてやつに止めるよう説得しようとしたが、まるで意味がなかつた。そいつは俺の言葉など忘れたかのようにその後もいじめを続けていたのだ。

同じことを繰り返すわけにはいかないけど、今井も助けてあげたいと思い必死に考えた。

そしてこの時からだろう。雪ノ下や由比ヶ浜や高校で知り合つたやつがやめるように言つてきたやり方をするようになつたのは。

『比企谷くんいる？あ、いるじゃない。日誌取りにこないから先生持つてきたよ』

偶然先生が今井をいじめていた女の子、めんどくさいからA子でいいか、A子がきてすぐに教室に現れたのだ。

『どうしたの？今井さん、泣いてるようだけど』

『俺が今井をいじめて泣かせました』

俺は先生が今井が泣いてることに気づいた時、咄嗟にそう言つた。なぜならA子ならば、

『私は庇おうとしたんですけど……』

このように保身のために今井を擁護するはずだと思ったからだ。

そこからは運も良かつた。クラスメイトがどんどんやつてきて、みんながみんな今井を擁護した。そして、俺のように今井がいじめられていたのを知らないやつも擁護し始めた。

今井は必死に俺ではなくA子が悪いと言っていたが、誰も耳を貸してくれなかつた。結果だけ言うと俺がすべて悪いことになつた。

『それで八幡、なんでそんな事したんだ』

親父と俺と担任による三者面談の帰り道で親父が聞いてきた。この当時、親父は俺のことだから理由があつてこうしたんだろうと思つてたらしい。本当かどうかわからんが。俺は親父なら言つてもいいだろうと思つたのだろう。

すべて言つてしまつた。

『そうか。そのやり方は間違つてゐる。間違つてはいるがお前にしては頑張つたな』

そう言つて親父は俺の頭を撫でてくれた。

その後、俺の最も恐れていた今井本人からの訴えや俺に話しかけてくることなどなく、むしろA子以外の女の子と仲良くしているようで安心した。

『なぜ君は一人でいるのかな？みんなと一緒に遊ばないのかい？』

その年の7月のことである。俺はあの一件以来ボツチなので、昼休み1人で校庭の木陰で読書をしていた時に突然知らない人に話しかけられたのだ。

『そんなあやしい人を見る目で見ないでくれよ。ほら、来客用のカードを下げているだろ』

そんなことを言いながら首から下げるカードを見せてきた。確かに来客用のカードらしかった。

『おじさんこそなにしてる人なの？』

『俺は外務官をしているんだが、言つてもわからないかな？そんな事よりおじさんの質問にも答えてくれないかい？』

外務官をしていると言つたおじさんは、スーツ姿だったが話しやすい優しそうな笑顔をしていた。俺は知らない人だしいいだろうと思い、なんとなしに喋つてしまつた。

『そうなのか。自分を犠牲にまでしてその女の子を助けたのはなぜだつたんだい？』
『その子が好きだつたのもあるけど、ただ見過ごせなかつたんだ』

『そうかそうか。話してくれてありがとう』

そう言つておじさんは優しそうにニコニコしながら俺の頭を撫でてから俺の元から去つていつた。

さつきの親父との電話でわかつたことだが、この時のおじさんが今井の父親だつたらしい。俺とあつた時は帽子をしていて目元が見えなかつたから気づかなかつたらしい。そしてこの会話のおかげで、今井の許嫁の話を了承してくれて俺の両親にも頼んでくれたらしい。全然知らなかつたし気づかなかつたわ。

それからすぐあとのことである。クラス中に今井の転校が知らされたのは。

朝のHRで先生が今井の転校を知らせた瞬間、クラス中がすごい騒がしくなつた。それもそうだろ。この頃には今井はクラスの中心と言つても過言ではなかつたのだから。

俺も表情は変えなかつたが、頭の中ではすごいことになつていた。

転校の理由は、父親の海外赴任がこれまでだと長くとも半年だつたらしいが今度は8年もの長期になつてしまい、いつそのこと家族全員で海外に行こうとなつたらしい。

そして今井が登校する最後の日に、クラスでは放課後を使いお別れ会が行われた。俺は当然のように呼ばれるはずもなく、また自分から行くと邪魔をしてしまうと思い、帰つてしまおうと思っていた。しかし、お別れ会が終わつたあと片付けは手伝えと言われてしまつたので、それでも参加するわけにもいかないので、屋上で暇を潰していた。

『比企谷くんいる?』

突然屋上に繋がるドアが開いたと思つたら、お別れ会の真つ最中のはずの今井がいた。

『何やつてるんだよ、おま『名前で呼んで』……今井』

『なにってずっと言いたかつたことを言いに来たに決まってるじゃん。それにクラスのみんなも大事だけど、それよりも一番大事なのは比企谷くんだけだから。比企谷くんがいないお別れ会なんて居ても楽しくないよ』

当時の慌てようを思い出したけどほんとにやばいかつた。好きだつた子に遠まわしに好きとか言われたらそれはね。

『それでなんだよ、言いたいことつて？』

『まず比企谷くんのことハチ君つて呼んでいいかな？』

『まあ、それぐらいならいいけど』

すごい勢いで言われたせいで了承しちゃつたんだよな。

『ありがとう。私はハチ君のこと大好きなんだ。だけど、海外に行かなくちゃいけないからさ、ハチ君が良ければ私と許嫁になつてくれないかな？』

この時の俺の気持ちは今でも覚えてる。いや、思い出した。信じられない、その一言だつた。てか、こんな重要なこと忘れる俺の記憶力やばいね。

『ほんとに？』

『ハチ君に嘘なんてつかないよ。それで返事は？』

『これだけ言われたら俺もちゃんと言わなくちゃな。俺も今井のことが好きだ。俺でよ

ければ、その、許嫁になつてくれ』

その後家に帰つたら珍しく両親がいて、何事かと思っていたがすぐあと今井と今井の両親が訪ねてきた。

そこからは怒涛の展開だつた。今井の父親と親父が旧知のなかだつたらしく、そしてどうやら親父から今井の父親に俺のことを話したらしく、転校の話を学校側にする時にまたま俺と会つて話したらしい。

回想終了つと。にしてもこのサンドイッチ美味すぎる。このまま店に出しても売れるだろ。

第6話

「ちょっと早く着きすぎたな」

現在時刻14時30分と圭萌と約束した時間よりも30分も早く来てしまった。遅れるよりはいいかと思い、気持ち早めに家を出たけど思ってたよりも早く着いてしまつたようだ。これも早く圭萌に会いたいと思つてるからこそなのかなと、思いたくないのが正直な今の気持ちである。

圭萌は15時頃には講座が終わるとか言つてたから、あと30分以上待たなきやいけないのか。

「てか、ここでいいんだよな。あいつ講座の終了時間と目的地だけは言つてたけど、待ち合わせ場所自体は言わなかつたし。一応駅とららぽーとを繋ぐ通路で待機してるけどちゃんと会えるのかね」

そもそも俺は圭萌が通つている大学を知らないからここで待つても来ない可能性

があるのか。

「あれ？ ハチ君早いじゃん。待ち合わせ場所伝え損ねてごめんね。だけど会えたからいいよね。それとあいつじやなくて名前で呼んでよね」

「ついてそういうよくしゃべるな圭萌は……で、なぜ雪ノ下が？」

後ろから圭萌の声がして振り返ると昨日とは違ひ可愛らしいスカートと（昨日はパンツだつた。じゃないとおんぶとかできません）半袖のカットソー（昨日はトレーナー）を羽織つてた）という春っぽい服装の圭萌と何故か隣によく知つてる女性、てか雪ノ下雪乃その人であるが、何してるんですかね？

「あら、ごきげんよう比企谷くん。それで今井さん、貴方が待ち合わせしている人つてこの虫ケラのこと？」

「おい、雪ノ下会つてそういう虫ケラとはご挨拶だな。そんな事ばつか言つてると友達が由比ヶ浜しかいなくなるぞ」

「ちよつと勝手にしゃべらないで下さる。今、私は今井さんと話しているのよ。あなたはそこで「ちよつと待つた！」何よ、今井さん大きな声出して」

「私が待ち合わせしてたのは確かに彼のことだけど、そんな事より雪ノ下さん、それとハチ君あなた達はどんな関係なのかな？すぐ楽しそうに話しているけど」

なんか圭萌のやつがすぐ怒ってるのか？よくわからんがともかく声がでかい、ここ人通り多いからもう少し声のトーン下げろよ。

「なに言つているの今井さん。流石の私でも怒ることがあるのよ。なぜ、私がこんな捻くれた人を好きにならなければいけないのかしら。天変地異がおころうとも、人類が滅亡して2人だけになつたとしてもそれだけはないわ」

「こいつ断言しやがつたな。昔のことは忘れるつてことか。

「そうだぞ、圭萌。俺と雪ノ下はただの友達だ。それ以上でもそれ以下でもない」「えつちよつと待つてハチ君、なんで私のこと名前で」「なんでつてさつき自分で言つただろ、名前で呼べつて」「えつ…でも昨日までは苗字だったのに……」

顔を真っ赤にさせてブツブツ言つてるけどなに言つてるか聞こえない。けど、もう俺は吹つ切れてるから恥ずかしくないんだよ。

「比企谷くんと今井さんの関係はこの感じだと恋人関係つて事かしら。おめでとう比企谷くん」

「そんなわけないだろ」

「え？」

なんか一気に圭萌が絶望した顔になつて反応してきたけど。まだ続きがあるんだが、これもこれで面白いな。おつと、いかんこんな所でSつぽさだしても、意味無いから先に進めよう。

「恋人関係じゃなくて許嫁だよ」

圭萌が赤面してうずくまるのはまだわかるけど、なぜ雪ノ下まで赤面してるんですかね？

「なるほどな、圭萌と雪ノ下は同じ大学だつたと。そして同じ講座を取つていて、それが今日早く終わつたから一緒にここからで遊んでいたと」

「そうなるわね。今井さんは待ち合わせしてゐる人がいるけどまだ時間よりも早いし、時間まで一緒にウインドウショッピングしようつて話になつたのよ」

「それで待ち合わせ時間の30分前になつたからハチ君を探してたつてわけ」

場所を移して今はららぽーとのなかにある喫茶店である。なるほどな、だから圭萌と雪ノ下が駅側からじやなくてららぽーと側から来たのか。それよりも雪ノ下と同じ大

学だつてわかつただけでも今回のこれは収穫ありだよな。

「それでは私はこれでお暇させてもらうわね」

「もう行くのかよ」

「あんまり邪魔してもかわいそだしね」

そんなこと言つて雪ノ下はそそくさと出ていきやがつた。まああいつがいると話しずらいからな。空気を読んだのだろ。またなんか埋め合わせしないとな。

「それでハチ君、なんか私に言うことがあるんじやないの」

怒り口調だがすごい笑顔なんだけど。どうしよう写メ撮りたい。

「ああ、そうだな。まずは、すまなかつた。お前のこと忘れていて」

「それはいいよ別に。理由もハチ君のお父さんから聞いたし、別に怒つてないよ」「それに昨日圭萌と食事のはずだつたんだろ。それまですっぽかしてすまなかつた

「あー、てことはもしかして昨日一人で呑んでた理由とかもわかつちやつてるのかな」

「なんとなく」

「そつかー、だけど本当に悲しかったんだから。まあ、そんなことは置いといて言う」と
他にあるよね。それも今のことよりも大事なことが」

「まじで」

「早く言いなよ」

いい笑顔だな。この笑顔何円だろうな（現実逃避）

「先に言つとくがここまで謝罪とは全く関係ないからな、これから言うことは」「
そんな事言わなくともわかってるよ」

まさかこんな所で言うとはな。ここ喫茶店だけどいいのかよ。

「俺は圭萌のことが好きなんだ。だから俺なんかで良ければ結婚してくれないか」「
いいよつて、あれ？結婚」

「ああ、そうだよ。結婚してくれるよな？」

「えつ……うん……」

赤面からの上目遣いいただきました。まじで可愛いな俺の許嫁。うん?、お前の顔も真っ赤だつて?当たり前だろ、ポーカーフェイスでこんなできたらそれは人間じゃない。

「いいんだけど、まさかプロポーズまでするとは思ってなかつたよ。うん、私もハチ君のこと大好きだよ」

耳まで赤くなつてるよ。あつ、俺もか。

「ららぽーとでの買い物は良かつたのかよ?」

俺の部屋に行きたいと圭萌が言うのでららぽーとを出て歩いて向かってる途中である。

「うん、別に見たいものは雪ノ下さんといいる時に見ちゃったし。それにもともとは1からハチ君のことを落とすために、まずはデートからつて思つたから誘つたところもあるからね」

「なるほどな、もう既に俺は落ちてるから意味がないと」

落ちてるつて言うか圭萌なしでは生きていけないような気がする。誇張とかじやなく、マジで。

「それに料理をする材料買うのにハチ君の家の近くのスーパーのほうがいいかなって思つて」

「夕飯作ってくれのか」

「当たり前じやん。それとも私の作つたご飯じや嫌かな」

「そんなわけあるか。朝飯で圭萌が作つてくれたサンドイツチ、すげー美味かつたぞ」「ほんとに、それなら良かつた」

高校の頃に食つた雪ノ下の作つたご飯よりも美味しかつた、て言いたいけどこれを言うと、まためんどくさいことになりそุดからやめとこ。

「なんかハチ君が隠してるような」

そんな事考えてると圭萌からの疑いの目が。疑われても、しゃーなしなだからいいけど。だからと言つて、そんな目で見られても嬉しくもないから、できることならやめて欲しいけど。

「何言つてるんだよ、俺が圭萌に隠し事するわけないだろ」

「そこまで言うならいいけどね。朝ご飯で思い出したけど電話番号とメールアドレス登録してくれた？」

「悪い、登録はしたけどメールするの忘れてた。帰つたらするよ」

今してもいいような気がするが、歩きスマホとかしちゃいけないからな。お前らも絶対するなよ。八幡お兄さんとの約束だからな。

「えーと、それでスーパーはどこだっけ？」

「こっちだよ」

そう言つて手を繋いでみたら案の定顔が赤くなつたな。可愛いな、ほんと。

第7話

圭萌 side

「どこから回るんだ？」

「じゃあ野菜売り場からで」

「了解した」

そう言つて自分から買い物カゴを持つてくれるハチ君。ほんとにちよつとした事に、
気付いてくれる優しさは変わつてないな。私はこういうところにも惹かれたんだよね。
ハチ君からの告白は驚いたけど少し不安があるんだよね。その事については帰つて
からゆつくり聞くとして、今はどんな料理を作つてあげたら喜ぶのか考えなくちや。朝
見た冷蔵庫の中だと何も無かつたから材料はすべて買わなくちやダメだよね。

「ねえハチ君」

「なんだ？」

「ハチ君は何か食べれないものや好きな食べ物とかないかな？」

「トマトは苦手だな。今、食べたいものはそうだな……ハンバーグかな」

トマト苦手なんだ。良かつた聞いてみて。聞けなかつたら普通にサラダに出してたところだよ。それならメインはハンバーグにしてトマト無しのサラダとポタージュにしようかな。

「そういえば今日どうするんだ？」

私が豆腐が安いことに気付いて、今日は豆腐ハンバーグかなと思つてたら、隣でカゴを持つてくれているハチ君が突然そんな事を聞いてきた。それにしても横顔もかつこ

いいな。小学校の頃は可愛いって感じだつたけど今だとかつこいいだよね。それにしても何のことだろ？

「どうゆうこと？」

「いや、だから今日も泊まつていくのかそれとも夕飯だけ作つて帰るのかつてことだよ」

ちよつとハチ君なに言つてるの。周りの人が驚いた顔で見てくるじゃない。やばい、顔赤くなつてないかな。ハチ君も気づいたのか顔が赤いし。

それにしてハチ君これから的事つていうかまだ全部聞いてないみたいだね。説明したいけど流石にここではマズイよね。

「ハチ君その話は後でね。それと恥ずかしいからもう少し声のトーン落としてよ」

「／＼＼＼＼すまん」

その後も周囲の、特に老夫婦などから温かい目で見られながらもなんとか買い物を済ませて、今はハチ君の部屋に向かう途中である。

買ったものはなにも言わずにハチ君が全部持ってくれた。気配りできるのはいいけどど、他の女の子にもやつてないかだけが不安だな。いや、やつてあげるのはいいけどそれでさらに惚れられたりとかしてないよね。ハチ君は私のことがす、好きだつて言つてくれたけど、周りの女の子がハチ君のことが好きつてことがあるかもしれないしね。早く結婚しなくちや。

「もうすぐ着くからな」

「わかってるよ、昨日も来たからね。今つて何時かな?」

「ん? ああ、えつと6時前だな。なんか予定でもあるのか?」

「予定つていうか、届くつていうか」

「届くつてなにがだよ?」

「それは届いてからのお楽しみです」

どんなに聞いても答えませんよって顔したら渋々諦めてくれた。驚くだらうなハチ

君、どうやらハチ君のお父さんから何も聞いてないようだしね。

「今、ドア開けるから待つてろ」

「ちょっと待つて。ドア開けたら私が先に入つて少しだけハチ君は待つててもらつてもいいかな？」

「いいけど、なんでたよ？」

「ちょっとやりたい事があつて」

ハチ君にはわからないかな？会つてみてから再度思つたけどハチ君つて好意関係のこと钝いんだよね。私からしたら良いのか悪いのか判断しづらいんだけど。

「いいよー」

「なんだよ、ほんとに」

「おかれりなさい、あなた」

「／＼／＼／えつと」

ヤツタ一、ハチ君の赤面いただきました。え？ 私も顔が赤いつて。やだなー、そんなわけないじやないですか。だけど私からやり返せたのは嬉しいな。

「なにニヤついてんだよ。そんな所に突つ立つてないで中は入れよ」

「イヤー、さつきは私がやられたからね。やり返せたようで何よりだね」「はあ、そういうことね」

私はハチ君の最後の言葉を余り聞かずに立ち上がり立つて、先に行こうとしてしまった。だけど前を向く時にハチ君の悪い顔が一瞬見えたような気がしたが、気のせいだと思つてしまつた。この時に私はハチ君にやり返せて嬉しくて舞い上がつてしまつていたのだろう。でなければ、気付いていたはずだから。（言い訳）

突然後ろから手を引つ張られた。倒れる、と思い身構えたが予想した衝撃がこなかつた。私の手を引っ張つた張本人が支えてくれたからなんだけど。ちよつと待つて顔近くない。鼻筋とか当たつちやつてんじやん。支えてくれたのは

嬉しいけどいくら何でも近くない。なんでハチ君はそんなにすまし顔なのよ。

私は首の上から全部が赤く染まるのが自分でもわかつてしまつた。しようがない
じゃん、突然のことだつたしかつこいい顔がすぐ近くにあるしで混乱がすごいよ。

「ごめん、強く引っ張りすぎた。だけどちゃんと言わなくちゃと思つてな。ただいま、圭
萌」

かつこいい笑顔でなんてこと言うのかな、私の許嫁は。

第8話

ピンポーン

「あ、来たかな」

それは帰宅直後のあれこれから復活しない圭萌を、ソファーに運んで買つてきたものを冷蔵庫にしまい終わつた時のことである。そういえばなんか届くとか言つてたのが届いたのかな？普通なら俺が出るべきなのだが、圭萌のほうがインターほんに近かつたから圭萌がでた。

『佐〇急便です。お届けに上がりました。開けてもらつてもよろしいでしようか？』

「はーい」

圭萌さんなんで俺の部屋のインターほんの使い方知つてるの？俺教えてないけど。一般的なものだからわかつたんだよね。

「お届け物はどこまで運びましようか？」

「ここに置いといて貰つて大丈夫ですよ」

俺が考え事してる間に玄関で圭萌が宅配業者に対応してるよ。

「ハチ君ハンコ持つてきて、ハンコ」

「わかつた」

流石にハンコの置き場所まではわからないか。わかつたらこわいけどな。

「ほら」

「ありがと。ここでいいんですよね？」

「はい、それではこれで」

宅配業者のお兄さんはいい笑顔で帰つて行つた。いつも思うけど、なんであんなに爽やかに笑えるんだろう。俺には無理だろうな。

「それで結局教えて貰つてないけど何なんだよこれは？」

「これはね、私の生活用品とか服とかだよ」

「なんでそんなものを、それにこれだけの量で」

「うなんです。ダンボール5箱なんです。いや、これは多いだろ。持つてくる時大変だつただろうな、宅配業者のお兄さん。それでも俺の部屋で何するつもりなのこの子。

「理由は流石にわかると思うけど、この話はタゞ飯のあとでね」

「ごめん、理由わからないんだけど。

＊＊＊

「なんでそんなに見てるのかな？」

「いや朝飯があまりにも美味しかったからさ、きっと手際がいいんだろうなと思ったから見学させて貰おうかと。ダメだつたか？」

「別にいいけど。だけど少し恥ずかしい」

最後の方になんか言つてたようだけど、声が小さくて聞こえなかつた。今は圭萌に夕ご飯を作つてもらつてることである。作つてもらつている間あまりにも暇なので、手伝うと言つたのだが断られてしまい、もう一回言う機会を伺つているのである。

それにしても手際がいい。俺なんか比べるまでも無く、もしかしたら小町よりもいいかも知れない。まさか俺が小町より優れていると思わせる人に出会う日がこよonthan。はい、そこシスコンとか言わない。現に今は一人で暮らしてるから違うからな。それにシスコンだとしても千葉の兄妹だからしようがないよね。

「あとはこれを煮るだけっと」

どうやら今日は煮込みハンバーグらしい。それにサラダとポタージュもあるみたいだな。

「お皿の準備とかは手伝つてもいいよな?」

とか言いながらもう準備するために食器棚に向かつてゐんだけどな。これで断れまい。

「うん、そうだね。お願ひするよ」

とても可愛らしい笑顔いたしました。その笑顔をくれるなら何だつてしゃいそういう俺が怖いよ。だけどしようがないよね、笑顔が可愛いからね。

「そういえば今日はポニーテールなんだな。昨日はサイドテールだつたような気がしたけど」

「は、ハチ君」

「外に出掛ける時はサイドテールが多いけどね。料理する時はサイドテールよりポニーテールのほうが料理しやすいからしてるんだけど似合わないかな」「いや、そんなことない」

むしろ似合いすぎて困っちゃうぐらい。髪型は基本的に結ばずにそのままがいいけど、結ぶんならポニー・テールが一番だと思つてたども私が八幡です。

ぼふつと音とともに圭萌が俺に抱きついてきた。突然積極的になつて八幡的にポイント高いけどどうしたんだろう。ちよつと待て、涙目になつてんじやねえか。

「どうした?・ゴキでも出たのか?」

おかしいなちゃんと無駄に広くて家具も大きいけど掃除はしつかりやつてるんだけどな。ゴキが一匹でもいると駆除するの大変だらな。俺も人為変態した方がいいかな?

「ゴキブリは出てないけど…」

「じゃあどうしたんだ?」

よくわからないけど、ひとまずできる限り優しい声で言つてみた。てか、もうあと一飯もつて食べ始めるだけなんだけど。

「ごめん、ご飯炊くの忘れました」

あー、そういうことね。ひとまず、

「圭萌はかわいいな」

「へえ？」

抱きついてきてたからそのまま抱きしめて言っちゃいました。だつてさー、抱きつき十涙目十上目遣いとかむしろ我慢しちゃダメだと思うんだよ。俺は間違つてない、いいね？

「忘れることがなんて誰にでもあるから大丈夫だよ。だから泣くな

「うん、だけど…」

「それに俺なんてしょっちゅう忘れるし」

「ほんとにごめん。どうしよう」

「俺がコンビニ行つてなんか買つてくる。パンと米どっちがいい？」

「いいよ、私のミスなんだから私が行くよ」

「圭萌は今日授業があつてろ。それに夕ご飯まで作つてもらつたからな。休んでろよ」

「でも……」

納得してくれそうにないなあ、この感じは。どうしたものかね。あ、そうだ。

「それじゃあ一緒に行こう」

「そ、そうだね。そうしよう」

本当は休んでて欲しいけどここで言い合って夕ご飯遅れるのもいけないよな。そして、圭萌さんなんで今少し言い淀んだんですかね？

* * *

「いただきます」

あの後、2人ですぐそこのコンビニに行つて、フランスパンを買つてきた。俺はどちらでも良かつたんだが、圭萌がフランスパンがあうよと言つたので買うことにした。あんまりそこのコンビニ行かないけど、近くにコンビニがあつて良かつた。なんで行かないかつて。そんなの決まつてるだろ。だつてマツカン売つてないし。マツカンがないコンビニなんてある意味無いつて思つてたけど考え方直さなくちゃな。

「朝飯食つた時も思つたけど圭萌の料理美味しいよな。このハンバーグなんて特にうまいよ」

肉汁が溢れるとかほんとにあるんだな。一緒にでてきたポタージュも美味しい、がつちり胃がつかまれてるよ。別にこのまま一緒にいる予定だから構わないよね。

「良かった。今まで頑張つて料理の練習してきて良かったよ。ハチ君を喜ばすためにやつてきたからね」

「／＼＼＼＼そうか」

ちょっとテレるんで俺の為とか言わないで貰つていいですかね。

「「（ご）ちそうさまでした」」

「俺が片付けるから圭萌は今度こそ休んでろよ」

「そうだね、お言葉に甘えさせてもらうよ」

美味しいご飯を作つてくれたので、片付けは俺がやろうと思つてたのですんなり意見が通つて良かつた。ご飯が美味しかつたけど、終始俺の顔をガン見する子のせいで若干食べずらかつたのは黙つておこう。

「片付け終わつたらソファーにきてね。色々説明するから」「ああ」

待つてました、この時を。ずっと謎だつた荷物とかやつと教えてくれるのね。うーん、長くなるかもだから飲み物持つてくれな。

「温かいものいれるけどなに飲む？」

「ありがと。じゃあ私は紅茶がいいな」

「わかった」

「はいよ」

「ありがとう、ハチ君」

「いえいえ。いちおう砂糖とミルクも持つてきただけどいれるか？」

「いや、私はこのままで大丈夫だよ」

片付けが終わり紅茶をいれてソファーに向かうと圭萌がスマホを弄っていたので声をかけた。何をしてたかは不明だけど。俺は2人がけのソファーの圭萌の隣に座った。2人がけだが大きめなので隣に座つてもそこまで密着しないらしい。今まで1人で座つてたから知らなかつたが。

「まずはどこから話したらいいかな?」

どうやら荷物の件以外でも話があるみたいでどこから話すべきか決めあぐねているみたいだ。

「ねえハチ君。ハチ君つてさこの部屋についてなにか思わなかつた?」

「？いつも通りの俺の部屋だけど」

「1年間住んでるから今更どこか変わったとか言われても気づくと思うけどそんな事なかつたよな。」

「そういうことじゃなくて、この部屋に住み始めた時1番最初に思ったことだよ」「初めに思ったことか……。単純に一人暮らしにしては広いってのと家具が大き過ぎると思つたな」

「1LDKなんだけど洋室が8畳とLDKが12畳とか広すぎるわ、とか思つたよね。それに食事用のテーブルに椅子が四つもあるけど基本的に俺の部屋とか人来ないから意味無いだろとか思つたね。」

「そりなんだ、この部屋は1人で住むには大きすぎるんだよ。そしてそこにはちゃんと理由があるんだよ」

そこで勿体ぶるように紅茶を飲み出した。別にそこまでためなくともいいけど。

「この部屋は元から私とハチ君が一緒に住むために借りたものなんだよ」

「へえー」

「あれ? 反応薄くない?」

「圭萌が紅茶飲んでる間に俺もそのことに気づいたからだよ」「察しが良いのは驚かせる方からだとつまらないよ」

「すまんな。だけどおかげでやつと色々なことがわかつたよ。この部屋と家具は俺の両親と圭萌の両親がくれたってことだな」

「概ねそうだね」

俺の両親がこんな広い部屋と家具を、突然俺なんかのために用意するなんておかしいと思つたけど、こういうことか。当時の俺の感謝の気持ちを返して欲しい。

「てことは、あのダンボールはここでこれから生活する為に持つてきたんだな」

「そうだけど、ハチ君私と一緒に住むのは嫌かな?」

「そんな訳ないだろ。むしろ嬉しそうだよ」

「良かつた」

圭萌は安心した様に一息ついてソファーに身を沈めた。俺がOKだすのそんなに心配してたのかよ。ここでダメとか言つたら俺が殺されるしな、主に互いの両親から。

「それじゃあ軽くこれからルール決めるか」

「その前に…」

「なんだよ」

「これ以上なんかあるんかよ。俺だつてもうサプライズ的な何か別に求めてないよ。

「一緒にお風呂入ろっか」

それは無理だよ圭萌さん。

第9話

「お風呂あがつたよ」
「わかつた」

「あれ？ ハチ君今日は顔を赤くしないんだね」「まあな。俺だつて日々進化してるんだよ。それにそんなホイホイテレるわけがないだろうと俺は言いたいね」「そうなんだ」

「なんでそんな残念そうな顔するんですかね？ 罪悪感が湧いてきちゃうじゃん。だけどお風呂あがりの破壊力は凄いからな。なんでこんなにいい匂いするのかね。それに

顔が少し赤いしで、油断したら襲つちまいそうだよ。変な気がおきるまえに（おきてるとか言つちゃダメ）風呂に行くか。

「じゃあ次は俺がはいるな」
「（ご）ゆつくり」

* * *

その後俺は今日も今日とて、トラップだらけのお風呂タイムを過ごすことになった。

脱衣場では昨日も見たけど未だに慣れない圭萌の下着とか、浴室が圭萌と同じいい匂いが充満していたりとか、それらのこといろいろなことを想像してしまうのはしようがないよな。

これからこの家で生きていけるのか心配になりながらお風呂からあがつたら、リビングのソファーアで座つて圭萌の姿が目に入ってきた。

「風呂あがつたぞ」

「早かつたね」

「そうか？いつもこんなもんだけどな」

「結構早いと思うけど」

「ええねえ。まさか長くあそこ（風呂場＋脱衣場）にいると圭萌のいろんなところを想像しそうになるからすぐ出てきたなんて言えね。

「あ、そうだハチ君。寝室にあつたドライヤー、勝手に使つちやつた」

「別にそれぐらい俺に許可とる必要ないぞ」

「いちおうね。それでさ、もしハチ君が良ければなんだけど私に髪乾かさせてくれない

かな

「それぐらい良いけど。むしろこつちこそ、そんな事させてもいいのかよ」「私がやりたくてやるんだからいいんだよ」

ドライヤーで乾かすのめんどくさくて、やらないことが多いからな。自然乾燥とかざらである。流石に他人にそれも好きな人に髪を乾かして貰うなんて初めてなんだけど。

「それじゃあ始めるから動かないでね。あと痛かつたり痒かつたりしたら言つてね」

そんな事を言つてからドライヤーの音とともに、圭萌の手が俺の頭にあたつた。髪を乾かすのだから手があたるのは当たり前なのだが、なんて言うんだろうなこの感じ。

頭つてか髪の毛の毛先から感じる圭萌の手とか新鮮だな。

新鮮とか言うほど圭萌の手の感触を知ってるかというと、まだ数える程しか手をつないでいないからわからないけど、だけどやつぱりいいよな。

後半になるにつれてなんか頭を撫でられてるようを感じて、少し恥ずかしく感じたのは内緒である。

「よし、こんなもんかな。どうかなハチ君」

「お、おう。いいと思うぞ」

「良かつた！」

「今度は俺がしてやるよ」

「俺でも恥ずかしいと思つたんだから、きっと圭萌にやつたら恥ずかしくなると思うんだよね。むしろ毎日やつてあげたい。

「ありがとう、じやあ明日お願ひしようかな」

「了解した。それじやあ髪も乾かし終わつたし、同棲するにあたつてのルールを決めるか

「そうだね。それでルールつて何を決めるの？」

「まずは家事関連だな」

「ハチ君もやつてくれるの」

「そんなの当たり前だろ。全てを任せなんてするわけないだろ」

俺はもともと専業主夫希望だしな。流石にもうそんな事言わないし言えない。

「そ、 そ う な ん だ」

な ぜ に テ レ る ん で す か ね。 結 構 普 通 な こと 言 つ て る と 思 う ん だ け ど な。

* * *

「こ ん な 所 か な」

「そ う だ な、 料 理 は 僕 も で き る 時 は や る か ら」

「ありがとね。楽しみだな、ハチ君の作つたご飯」

「そんなに期待されても困るんだが…。所謂男の料理だからな、大雑把なもんだぞ。圭萌の作つたご飯の方がずっと旨い」

「それでもやっぱり楽しみだよ」

そんなもんかね。やっぱ俺は圭萌の作つたご飯が一番だと思うんだけどな。

「そうだハチ君、私聞きたいことがあつたんだ」

「なんだ」

「雪ノ下さんとはどんな関係だったの？」

真剣な表情でそんな事を言つてきた。だけど確か3人でいた時しつかり説明したよ
な。

「ただの友達だけど」

「本当に? だつて雪ノ下さんが男の人と喋つてゐるところなんて見たことないし、全くて
言つていいほど男の人との関わりがないんだよ」

期せずして雪ノ下の大学生活を知つちまつたな。まあ、予想通りというかなんというか高校の頃とあんまり変わつてないみたいだな。心配するのも大きなお世話とか言われそうだけど少し心配だな。

「高校の頃からそんな感じだつたと思うぞ」

「だつたら尚更怪しいんだけど。本当に何もなかつたんだよね」

「あいつと付き合つてたつてことはない。それに俺とよく喋るのは高校の時に同じ部活だつたからだよ」

「へえー、どんな部活だつたの？」

「雪ノ下に聞いてないのか」

「全く知らない」

「奉仕部つて部活でな、2年生から俺が強制入部させられてそこでいろいろあつたんだ」

「強制入部つてところが気になるけど、それよりも何人ぐらい部員がいたの」「なんでそんな事知りたいんだよ。まあいいけど、俺もいれて3人だつたな」

「なるほどね。もしかしてさ、その3人で男の人つてハチ君だけだつた?」

「よくわかつたな、確かにそうだけど」

「やつぱり。ハチ君まだ私に言つてないことがあるよね、雪ノ下さんことで」

「いや、俺から言えることは結構喋つた筈だけど」

「それじやあハチ君からは言えないのかな、雪ノ下さんに告白されたことがあるつてことは」

「なんで知つてるんですかね、圭萌さん。もしかして断片的に雪ノ下から話聞いてたのかな。」

「すぐ驚いてるところ悪いけど、大丈夫だよ怒つてるわけじゃないから。だけど、なんで隠してたのか気になるんだけど教えてくれるよね?」

別にやましいところがある訳じやないのになんてだろう冷や汗が止まらない。

「それは誰から聞いたんだ」

「雪ノ下さんと恋バナした時にね『私は昔部活仲間に告白したことがあるの』って言つてたんだよ。結果は言つてなかつたけど」

「おい、雪ノ下なんでそんなこと言つちやつたの。俺には理解出来ないよ。そして雪ノ下も恋バナとかするんだな。少し驚き。」

「わかつた、言うから。そんなに怖い顔するなつて」

「してないよ、そんな顔」

「確かに高校卒業の時に雪ノ下から告白された。俺はあの時、奉仕部での関係が好きだつたから断つたんだよ」

「うなんだ」

ホツとした顔した圭萌がまたこつちを見てきた。

「それじやあなんで言つてくれなかつた」

「それは雪ノ下に悪いと思つたからだよ。だけどもう雪ノ下自身が圭萌に言つてるんな

ら話は別だからな」

「これは本当に思つていたことである。やつぱり告白された相手が勝手に他の人になにか言うのは嫌だろう、ソースは俺。

「そつか、そだよね」

「わかつてくれてなによりだよ」

「だけどハチ君。私はとてもとても不安になつたよ」

「そうなのか。それはすまんかった」

「つきましては明日私とデートしなさい。これは命令だからね、拒否権とかないよ」

圭萌は本当に不器用だな。デートに誘いたければいくらでも普通に誘えればいいのに。俺が嫌だとか言うと思つているのだろうか。むしろ俺から誘うべきだな、これは反省しなくては。

「承りました、お嬢様つてな」

「いいね、私がお嬢様でハチ君が執事」

「確かに良いけど俺は圭萌の許嫁だからできないな」「そうだね」

やつと圭萌も慣れてきたのか。もうちょっとテレる姿も見たかつたけどな。それに良かつた明日はバイトがなくつて。

「それでどこに行くんだ」

「雑貨屋さんに行こうかなって」

「なんでしたま」

「折角一緒に住むんだからお揃いのものが欲しいなって思つて、ダメかな」

俺の許嫁が可愛すぎてやばい。なんでこんなに可愛らしいこと考えつくのかな。そしてこれ以上可愛いところ見せられても困る。

「いや、いいんじやないか」

「やつたー、明日はデートだ」

嬉しいのはわかるけど圭萌さんや、飛び跳ねるのはやめよう。その可愛らしい寝間着のしたにいらっしゃる一つのものが激しく主張してるので。

「ふう、今日も思つてた以上に疲れた」

あの後、一緒に寝ようと駄々をこねる圭萌をなんとか説得して昨日と同じ場所でそれ寝ることになった。今日のことを思い出すと…………うわああああやばい、恥ずかしすぎる。何やってんだよ俺は。なんで手を繋いだり抱きしめたりし

てんだよ。うわああああ！！

～～10分後～～

ふう。やつと落ち着いた。これは圭萌に嫌われてたら黒歴史が一気に増えるところだつたな。ほんとに何やつてるんだか。

「ハチ君起きてる？」

圭萌が寝てるはずの部屋のドアが開いて、誰かが近づいてきたって圭萌以外にいないんだけどね。どうしたんだろう？（ちょっと寝てるフリして驚かせようかな。（さつきまで悶えていたことは忘れた）

「うりうり」

そんな事言いながら頬を指で押してくる圭萌。起きてるか確認するための方法がい
ちいち可愛いなおい。

「よし寝てるね。ごめんね、本当は昨日みたいに1人で寝られたら良かつたんだけどどうしても寂しくて。それに昨日1人で飲んだせいかな、ハチ君が何処かに行つちゃうんじゃないかと思つちゃつて…」

圭萌は俺が寝てると思つてるらしく、そんな事をいつもより小さな声で言つた。たぶん普段なら聞き逃しているかもしれないが、今は夜中なのでとても静かで物音一つしないから聞き取れたのだろう。

そんな事思つてたのかよ。俺はなんでも気づかなかつたんだよ。人間観察は得意だつたはずなのに、なんで見逃してんだよ。知らず知らずのうちに圭萌と許嫁になれて舞い上がつてたのか。それで大好きな人のことを考えてやれなくなるなんて、クソ野郎もいいどこだろう。そんなこと考えてたら勝手に身体動いてしまつた。

「ごめんな圭萌、気付いてやれなくて」

俺は抱きしめていた。圭萌は驚いたのだろう肩がビクツつなつたあと腕を背中にまわしてきた。

「起きてたんだハチ君。謝らないでよ。こればっかりはしようがないし」

「それでもやつぱり言いたいんだ。それに寂しかったんだろ」

「そこから聞いてたんだ」

「まあな」

さて、ここまでできたらやらなくちゃな。また今度悶えるはめになるだろうけど、ここまできたら引き返せないし引き返すつもりもない。

「よつと」

「ち、ちよつとハチ君なにしてるの!!」

「お姫様抱っこに決まってんだろ。それにしても顔が真っ赤だな圭萌」

「うるさいな、下ろしてよ重いでしょ」

「いや別に重くないぞ。むしろ心配になるぐらい軽い」

そんなこと言いながら器用に手を使って圭萌が使っていた俺のベットがある寝室のドアを開けた。

「下ろすぞ」

「恥ずかしすぎる」

そんな事を言いながら掛け布団に潜つて唸り出した。どれだけ俺を萌えさせれば気が済むんですかねこの子は。

「ほら、寝るぞ」

「えつ。ちよつと待つてまだ心の準備が」

「何もしねえよ。だけど、確かにこれだけ大きいベットに1人で寝るのは寂しいよな」「う、うんそうだよ。えつとちよつと待つて、まだ冷静にこの状況がわからない」

「わかりやすく言うと俺が添い寝してやるってことだ、言わせんなよ恥ずかしい」

「そうだよね……、ありがとうハチ君」

「こんなことで良ければいつでもやつてやるよ」

「本当に?」

「ああ」

「今言つたからね、いつでもつて」

「やばいやらかしたか。俺も隠してるつもりが緊張のせいでいつもより思考がまわつてねえなこれは。」

「じゃあハチ君、腕枕してよ」

「了解しましたよ、お姫様」

「それから圭萌は驚くほど早く寝てしまい、本当にさつきまで寂しがつてたやつと同一人物か疑うほどだつた。」

俺は言うと、

「なんでこんなにいい匂いがするんだよ」

簡単に寝れるわけもなく、やつと寝れたのは外が明るくなつた頃だつた。

第10話

圭萌 side

白い天井だ。昨日寝起きに見たから2度目だけど、やつぱりまだ目新しかったりする。それと昨日とは状況が違かたりする。

「いつもはかつこいいけど、寝顔はかわいいな」

そうなのだ、今朝はハチ君と一緒にいるのだ。目を閉じてるからかな、普段よりも可愛く見えるんだよね。可愛いっていうか幼い感じだ。普段でも、いつもはめんどくさそうを目でいることが多いけど、たまに見せるキリッとした目がかわいいんだけどね。

「いつまでも見てたいし、見てられるけどそろそろ朝食の準備しなくちゃ」

名残惜しいけどハチ君を起こさないように気をつけてベットから抜け出して向かうのは洗面所だ。そこから台所に向かい、朝食の準備をする。台所にある電波時計に目を向けると、予定していた時間を30分ぐらい過ぎていた。

「ハチ君の寝顔を眺めてたら時間がだいぶ経っていたってことかな」

少し急がなくちゃね。メインは昨日買ってきた卵とベーコンでベーコンエッグでいいかな。あとは昨日の残りのポタージュとフランスパンで準備は完了だ。

「思つたより早くできちゃったな」

自身の手際の良さを褒めるとしてハチ君起こしてもいいけど、昨日の夜は迷惑かけちやつたからもう少し寝させてあげようかな。

ハチ君は昔とやっぱり変わつてなかつた。私が困つてる時には絶対に助けてくれる。そういう所を好きになつたんだろうな。

あとは気が利くんだよね。昨日だつて夕ご飯作るの手伝つてくれるつて言つてくれたし、家事もやつてくれるつて言つてくれたしね。

私の方で反省点があるとすれば、夕ご飯の手伝いを断つちやつたことだよね。だけど、想像したら夫婦みたいで恥ずかしかつたからしようがない。ワタシワルクナイ。なんか思い出したら顔が熱くなつてきた。こんな所ハチ君に見られたら…ガチャ

「おはよう、圭萌」

マジですか。

* * *

「眠い」

眠いなら寝ろよとか言われるかも知れないけど、今日は圭萌とのデートである。おち
おち寝てる訳にはいけない。少しでも長い時間デートを楽しみたいってのは普通なこ
とだろ。きっとそれは隣りに寝てているはずの圭萌も思つてる事だと思う。
て……あれ?

「いない……だと……」

嘘だろ、もしかして全て夢。これが有名な夢オチつてやつか。圭萌を拾つたところか
ら一緒に寝たここまで全部夢だつたのか。それにしてもえらく現実味のある夢だな。
いや、許嫁がいたことやそれを拾うなんて冷静に考えると現実味がないな。

「そんな訳ないよな」

「はい、流石に気づいてます。起き抜けでボーとした頭でもこのベットに残っている俺とは別の匂いとか、ドアの向こうの部屋から感じる人の気配とか。もしかして先に起きて朝飯の準備してくれてるのかな。もしかしてじやなくて絶対にそうだよな。それでこの静けさだともう全部終わつたのかな。あんまり圭萌ばっかりにやらせるのは悪いよな。後片付けぐらいはやらせてもらおう。」

さて、このままベットの中にいても二度寝の危険が増すだけだしそろそろ起きるかな。

「おはよう、圭萌」

「お、おひやようハチ君」

なんか今瞞まなかつたか。それに顔が赤いような……まさか。

「大丈夫か圭萌、顔が赤いけど。もし具合が悪いようならちやんと言つてくれよ」

「大丈夫大丈夫、そんなんじやないから。顔だつていつも通りだつて。ハチ君が寝起きだからそう見えるだけだよ。ほら、洗面所に行つて顔洗つてきたら」

「お、おう」

なんか凄い早口で言われたから、驚いて頷いたけど本当に大丈夫かな。だけど、本人が大丈夫だと言つてるなら大丈夫なんだろう。もしかんかあつたらその時はその時で助けよう。

その後洗面所から俺が帰つてくると、普段通りの顔をした圭萌が朝飯の準備を全て終わらせて待つていたので、俺の勘違いだと先程の件は片付けて一緒に朝飯を食べた。食べ終えたら俺が後片付けをして、そこから互いに身支度をして（ラツキースケベはない模様）ひとまず駅に向かうことになった。

「駅に向かってるつてことはららぽーとに行くのか？」

「今日は違うよ。今回は電車に乗って隣町に行こうと思つてるんだ」

俺は駅に向かう道すがら、昨日は具体的な場所までは教えてくれなかつた今日の目的地について聞いてみた。そしたら少しだけ答えてくれた。何この子、どこでこんな焦らしプレイを覚えてきたのよ。たぶん無意識な、いうならば天然でやつてるんだろうけどな。

一昨日から過ごしていて改めて思つたこと、ていうか思い出したことだけど、圭萌は少し天然だということだ。悪くいうと少し抜けているのである。そこがまた可愛いんだけどね。

「隣町つてことはもしかして駅前のショッピングモールか?」

「よく分かつたね」

「まあな」

だけどそれなら駅前のららぽーとでもいいと思うんだけどな。別に圭萌と行くなら

どこでもいいけどさ。

「ちゃんと理由があるんだよ。隣町のショッピングモールには10ftが入ってるんだよ」

なるほどな。駅前のららぽーとには10ftが入っていないから、わざわざ電車に乗つて隣町のショッピングモールまで行くのね。

「それにハチ君と少し遠くに行つてみたかったんだ」

「なんか言つたか」

「な、なんでもないよ」

小声で何か言つていたようだけど、まさか俺の服装が変だつたか？確かに流行とかには疎いけど俺なりに頑張つてみたんだが。あつ、そういうえば服装か。

「なあ、圭萌」

「どうしたの、ハチ君」

「いや……なに……」

「本当にどうしたの？」

意外と意識したら緊張するな。だけど、これから嫌と言うほど言うことになるんだし、こんなことじやダメだよな。

「今日の服とつても似合つてると思うぞ」

「もう……全然言つてくれなくて自信をなくすところだつたよ」

嬉しそうな表情を見て、俺の予想は合つてたみたいだと思つた。代償として俺の顔が真つ赤だけど、圭萌も真つ赤だから大丈夫だよね。

「すげえ混んでるな」

「そうだね。3駅先だからそれまで我慢するしかないね」

ところ変わつて満員電車の中である。どうやら休日を使って俺らと同じく買い物に行く客と、なにかのスポーツ観戦に行く客とで電車が満員なのである。俺らは3駅先で降りるが、それまでこの人口密度の中にいるのは辛いものがある。3月も半ばなのだがこの人の量のおかげで電車の中はサウナ状態だ。

「おい、圭萌。俺と場所を交われ」

「え、うん」

なんとか圭萌をドア側に逃がすことに成功した。あのまま、後ろのおっさんと密着させとくとか俺には耐えられなかつた。おっさんが悪い訳では無いが念には念はある。そんな事を考えていると圭萌が近くに寄つてきて、

「ハチ君ありがとう」

と言つた。それだけならまだしも上目遣いに笑顔で言つてきたのである。あ、勘違いしないでね。顔が赤いのは車内が暑いからですから。

「無事についたな」

「そうだね。だけどこれからが本番だよ」

無事に俺と圭萌は満員電車から脱出し、目的地である駅前のショッピングモールに訪れていた。ここはららぽーとよりも大きく店舗数もららぽーとの倍あるので、正直1日では全ての店を回ることが困難だ。

「ひとまずl o f tに向かうのか？」

「そうだね、だけどl o f tに向かう途中で良さそうなお店を見つけたら入つてもいいかな？」

「別にいいぞ」

それからの時間の流れは早かつた。楽しい時間はあつという間に過ぎるとはよく言うけど、本当にすぐに昼ご飯の時間になつた。

「そろそろお昼時だけどどこで食べよつか」

「そうだな～」

「ここでどこでもいいとか言うと圭萌を困らせるよな。ここですぐに意見が言えるようにならないと。」

「じゃあサイゼでいいかな？」

「むしろサイゼでいいのかよ」

「私はサイゼよく行くし、大好きなんだから全然大丈夫だけど」

「俺もサイゼ好きだから全然いいぞ」

サイゼ好きすぎて店の方から来ないで下さいとか言われちゃうくらい好きである。

流石にそこまで言われたことないけどな。

＊＊＊

昼ご飯もつつがなく終了して、午後になつてやつとお目当てのloftに辿り着き、

そこで雑貨を買うことができた後のことである。

「ここら辺で休憩にしないか」

「そうだね。あ、ありがとう」

買うものも買ったし近くにベンチと自動販売機があつたのでそこで飲み物を買って休むことにした。別に俺はそこまで疲れていないが、圭萌が疲れてしまふのはとても嫌だつたので休憩することにした。

「すまん、少しトイレに行つてくるからここで待つてくれるか」

「早く帰ってきてね」

「了解」

それここで少し時間が欲しかつたのも理由の一つだ。

「良かつた、買うことできて」

さつき見た時は残り一つだったので、正直ないだろうなと思つて行つたけどまだ残つてよかつた。買ったことが嬉しく心の中でスキップして（心の中だけつてどこが重要な）圭萌が待つている場所に向かうと、全く知らない男3人が圭萌に話しかけていた。そこからの俺は俺が言うのもあれだが、たぶん電光石火だつたと思う。

「おい、俺の連れになんか用かよ」

圭萌の肩を掴んでいた男の手を、折るつもりで握りながら言つたら思つたよりも低い声が出てしまつた。

「痛てえな、てめえ何しやがる」

だが、悲しいかな。俺の顔でこんな事言つても効果はないらしく、むしろ怒りながら殴りかかってきた。なので、俺はそのままぶん投げることにした。投げられたのを見て他の奴らが騒ぎだした。

「なつ、てめえよくもやりやがつたな。おい、同時に襲いかかるぞ」

「やべつ」

先に攻撃してきたのそこで倒れてるクソ野郎だし、それにそもそも圭萌に手を出してる時点で簡単に返す気はないんだよな。だけどここでひとつ問題がある。俺は1対1の戦い方は習つたけど2対1は習つてないんだぞ。そんな時少し後ろの方から声がし

た。

「比企谷君は右を、私が左をやるから」

「はい」

その声に反応して俺は右から迫っていた男を投げ飛ばしたのとほぼ同時に、左側にした男も投げ飛ばされていた。

「まだやるのかな、少年達？」

「ちつ、行くぞ」

左側の男を投げ飛ばした人が男達に言うと男達は逃げるようには帰つていった。

「大丈夫だつたか、圭萌。ごめんな1人にさせちまつて」

「大丈夫だよ。それに話しかけられた時に私がちゃんと対応してたらこんな事にならなかつたし」

そもそも俺がここを離れなかつたらこんなことにならなかつたはずだから俺が悪いのに。

「2人とも無事なんだから良かつたじゃんか」

「ありがとうございました、陽乃さん」

「いやいや、たまたま通りかかつたら比企谷君が凄い形相で走つていくのが見えてね」

俺を助けてくれたのは、俺の合気道の師匠でもある陽乃さんその人である。

「本当に助かりました。俺一人じゃ流石に二人同時は無理だつたので」

「いいんだよ。比企谷君には凄い恩があるからね」

「そんなだいそれたことはしてませんよ。あれは雪ノ下と陽乃さんがそれぞれ歩み寄つたからですし」

「それでもだよ。比企谷君が雪乃ちゃんや私の背中を押してくれなかつたらそもそも仲直りできてなかつたよ」

大学に入学して少しした頃、雪ノ下と陽乃さんは和解した。俺もたまたまその場面に

居合わせたので少しばかり手を貸す形となつた。その後、俺は陽乃さんからお礼として俺がお願ひした合気道を教えてもらつたのである。良かつたあの時、陽乃さんからのお礼を合気道を習うことにして。あの時の俺グッジョブ。

「それに比企谷君。ダメだよ、大事な女の子をひとりにさせるなんて」「すいません…てなんで知ってるんですか？」

「いや、さつき私にお礼言う前にその子と喋つてたよね。その時に比企谷君にしては、めずらしく名前で呼んでいたからそうなのかなって思つてね」

相変わらずよく見ている人だな。油断ならないよ、まじで。

「えっと…ハチ君この人は」

「紹介しなくちゃな。この人は俺の合気道の師匠である雪ノ下陽乃さんだ」「よろしくね」

「よろしくお願ひします。私は今井圭萌つていいます。先程はありがとうございました」

「いいつていいつて」

「雪ノ下さんつて、もしかして雪ノ下さんのお姉さんですか？」

「そうだな」

「もしかしてあなたがあの圭萌ちゃん?」

「あの?」

「いやー、雪乃ちゃんがね最近よくあなたの話するのよ。それと私のことは陽乃でいいよ」

「わかりました、陽乃さん」

「ありがとうね、雪乃ちゃんと仲良くなってくれて」

あの後、陽乃さんと圭萌が仲良くお喋りしていつの間にかいい時間になつたので、帰ることになつた。

「ねえ、ハチ君。本当に何も無いんだよね雪ノ下姉妹とは？」

「だから何も無いって」

陽乃さんと別れて電車を降りてから、ずっとこの質問ばかりをしてくるのである。なんでだろう、俺ってそんなに信用ないのかね。

「そこの公園に寄つてかねえか」

「いいよ」

家に帰つてからでもいいのだが、せつかく外に出てきているので少しでも長く居たい

と思つた俺は自然とそんな事を言つていた。そしてベンチに2人で座つてから俺はさつき買ったものを圭萌に渡すこととした。

「ほら、これやるよ」

「えっ」

「もしいらなかつたら捨ててくれても構わないけど、出来ることなら俺のいない所で捨ててくれるとありがたいな」

「まだ見てもいいのに捨てる訳ないじyan。見てもいい？」

「ああ」

「わあ、可愛いネックレス」

俺が圭萌に贈つたのは、ハートの形に縁取られたネックレスだ。ハートの中には桜の花があるヤツである。

「ありがとう、ハチ君。ねえハチ君がつけてよ」
「別にいいけど」

言つたはいいものの、緊張してしまつてつけるのに結構手間取つてしまつた。だけど我ながらいい買い物をしたと思えるぐらいに似合つていた。

「どうかな？」

「似合つてるよ」

「本当にありがとう」

「お、おいなんで泣くんだよ」

「初めて贈り物を貰つて嬉しいのもあるんだけど、さつき助けてくれたのを思い出したらちよつとね」

俺がこのネックレスを買いに行つたせいで圭萌をあんなめに合わせてしまつたので、凄く反省しているんだけど喜んでくれてるようで良かつた。

「だけどやつぱり怖かつた。このままハチ君が来なかつたらと思つたら本当に怖かつた」

「なあ圭萌こつち向いてくれ」

「うん？」

そこで俺はキスをした。初めてなのでうまくできてるか心配だったのですがすぐに離した。

「安心しろ圭萌。俺はここにいるし、これから先もずっと一緒にいるから」

「うん、ありがとう。私もハチ君から離れられないからね」

そんな事を言つたのだろうが、俺の口により圭萌の言葉は最後まで聞くことは叶わなかつた。

第11話

「なんで私が怒つてるとかわかつてるとかね」

「すいません、全く覚えがないです」

「そんな訳ないよね」

怖いよ笑顔が怖いよ、圭萌さん。特に目が笑つてないあたりとか怖すぎて目を背けたい。

どうも、土下座系男子の比企谷八幡です。帰宅と同時にこの目が笑つてない笑顔で迎えられて、そこからの俺の土下座をする速さは生涯の中で最速を更新したと言つても過言ではないだろう。ひとまず、なんで怒つているのかよくわからないけど、俺が悪いんだろうと思い、今日1日の俺の生活を振り返つてみる。振り返つてもわけがわかるかはわからないけどね。

「今日はバイトあるんだよね？」

「ああ。午後の3時から8時まででその後バイトの先輩とタダ飯食べてくるから、今日はタダ飯俺の分作らなくとも大丈夫だぞ」

「それならちようど良かつたよ。私も今日は雪ノ下さんとタダ飯食べてくるから、ハチ君のご飯作れないからどうしようかなと思つてたんだよね」

アルバイトの有無を聞かれたから、なんか用事でもあるのかと思つたら俺とは関係ないでござつた。友達との食事ぐらい楽しんで来いと言いたいところだけもしここで

他の人、それも男だつたら怒り狂つてたかもしれないな。そんな事したら呆れられるかも知れないからやらないけど。その点、同性、特に雪ノ下ならまあ大丈夫だろ。それにしても、自分のことながら独占欲やだなあ。

「そういえばハチ君つてどんなバイトしてるの？」

「うん？」

「あつ、ちよつと待つて。当ててあげる」

普通に答えてあげようと思つたら、そんな事を言つて顎に手をあてて思案顔をします。これを素でやつているから手に負えないよな。どつかのあざとい後輩が見たら驚くだろう。そういえばあいつはどこに進学したんだろうな。会いたいかと問われると、素直に領けないけど少なくともかかわり合いがあつたから気になるよな。

「あれ？なんか私以外の女性のこと考えてるような」

「はは、何言つてんだよ、そんな訳ないだろ。それよりも俺のバイトわかつたのかよ」「うーむ……」

危ねえ、なんで俺の心の中がわかるんだよ。俺がわかりやすいのか。そんな訳ないよな。ないよね?

「ハチ君のことだから、できるだけ人との接触を避けようとするよね……」

「そしたらバイトできないよね、とか思つたけど言わない。人が思考してる時に邪魔するのには良くない、ソースは雪ノ下。

「となると……接客業はない……よね……わかつた、この前テレビで見たアレだ」「なんだよ、テレビで見たアレって?」

「流木探して売る奴でしょ」

「いや、そんな訳ないよね。いくら俺でもそれをバイトとして選択しないよ」

「えー、じゃあ何やつてるの?」

いや、なんでそんなに自信満々に答えたのか俺的には聞いただしたいとこなんだけど。そもそもなんだよ流木探して売るって。そんなバイトあるのかよ、もしあつてもやりたくねえよ。

「正解は喫茶店で雑用しているです」

「えつ、嘘でしょ。あの自分でぼつちとか言つてるハチ君がそんな人と喋らなきやいないバイトするなんて」

「そんなに驚くことないだろ。それに別にぼつちであつたとしても接客だつてできるんだぞ」

始めた頃は酷い有様だつたけど、慣れつて怖いよな。こんな俺でもちゃんとバイト出来てるんだから不思議だぜ。

「なんでしてるの？」

「？」

「バイトのことだよ。しなくても生活には困らないんじやないの？」

「確かに生活には困つてなかつたな」

それに今だつてバイト代はこれからのために貯金してたりする。おかげでこの前圭萌にネットクレスあげられたしな。そういえば気付いてるのかな？俺からネットクレスプ

レゼントしてつけてあげた意味。気付かない方がいいか。

「それならなんで始めたの？」

理由を聞かれるとは思っていたけど、そんなに「私気になります」的な感じで聞かれるとは思ってなかつたな。久しぶりにえるたそ見たくなつてきたな。確か実家の方に原作があつたはずだから、今度帰つた時に読み直してみるかな。

「始めたのは誘われたからだな」

「誰に？」

「そこのマスターに」

「なんでした」

「そこの喫茶店は俺が良く行く時間は、人が少なくて静かなんだけど休日になると混むらしくてな。特に最近は長期休みだからか人が多いらしくて、それでバイトしてくれつて頼まれてな」

「それでバイトしだしたんだね。なんか意外だな」

「どうか？」

「そんな事頼まれてもハチ君なら断りそうだけどね」

圭萌の中での俺つて……。あんまりよく思われすぎるのも良くないけど、流石にこれもこれでよろしくないな。

「まあ、なんとなくわかつたよ。そうだ、今度ハチ君がバイトしてる時に行くからね」「決定事項なのかなよ。俺に拒否権とかないのかよ」

「ないね。拒否されても嬉嬉として行つちやうもんね」

何故かドヤ顔でそんな事を言つている。だけど言えない。そんなドヤ顔ですら可愛いから何も言えない。ちょっと俺圭萌に弱すぎるだろ。

「それじゃあひとまず朝ご飯作つてくるね」

「よろしくな。俺はゴミ出ししてくる」

そう言つて俺と圭萌はベットをあとにした。

あの後は俺がバイト行くまで、2人でリビングで読者して、その後俺が先に家を出たよな。ここまで怒られるようなところはないはず、たぶん。うん、全然わかりましたん。

「わからん」

「本当にわからないの」

「ごめん、全く」

そこで圭萌は大きなため息をはいた。土下座しているため顔を見ることができないけど、これは完ぺきに呆れてるな。

「わかつたよ。それじゃあこれからする私の質問に答えてもらつてもいいかな？」

「おう、何でも答えるぞ」

「それと話しそうらいから顔上げていいよ」

圭萌はなんだかんだでこういう所が優しいんだよな。普通なら顔を上げさせずに踏みそうだよな。それで俺が喜ぶまでワンセットだな。まあ、ネタでやるだけで俺はドMではないからやつて欲しいとか思わない。ホントだよ。

「まずはじめに、ハチ君のバイト先つて他にもバイトの人が居て、その人と今日はご飯食べてきたんだよね？」

「そうだな。俺は基本的に休日と今日みたいな長期休みの時しかバイト出ないけど、先輩はほぼ毎日出てるらしくてな。それで今日一緒にご飯食べようって誘われてたんだ」

もしかしてバイトの先輩とご飯食べたことが怒ってる原因なのか。だけど確か今朝のうちに言つといったはずだよな。

「なるほどなるほど。それでその人って女性だよね？」
「えっと……」

「ハチ君？」

「はい……その通りです」

「なんで言つてくれなかつたのかな？」

「ごめん、そのことを言うのすっかり忘れてたんだ。それにあつちもたぶん俺のことなんて、なんとも思つてないぞ」

そこでまた圭萌はため息をはいた。なぜに？俺なんかおかしな事言つたか？

「その人がハチ君のことどう思つてるかよりも、女性に食事に誘わされて、それにホイホイついて行くハチ君が問題なんだよ……それにハチ君なんだかんだでモテるんから……」

最後までしつかり言えよ、最後の方全然聞こえなかつたぞ。

「それは仕方ないだろ。俺がバイトに入つていろいろ教えてもらつておいて食事の誘いを断れるわけないだろ」

「それでも心配だつたんだよ」

なんか圭萌の目に涙が浮かんでるんですけど。俺が言つてなかつたせいでここまで心配させてしまうとは。初めてできた恋人だからとかそんなの言い訳にならないよな。

「本当にごめん。これからは気をつけるし、もし女性とご飯吃る時は、ちゃんと圭萌に言うようにするから」

「わかったよ。別にそこまで縛り付けるつもりもないけど……」

「どうした？」

なんか圭萌が泣きそだつた顔から一瞬悪そうな顔になつたような。あれ？先程までの泣きそうな感じは？

「ハチ君」

「お、おう」

「私はとても心配したし少しだけ傷付きました」

「とても悪いと思つてます」

「だつたらなんでも言う事聞いてくれるよね」

「もちろん」

「言つたな」

あれ？今なんかサラツととんでもない事言われてそれを了承しなかつたか？圭萌もなんかイイ笑顔してると、解せぬ。

「じゃあさハチ君、頼んでもいいかな？」

「もう言つちまつたことだしな。よし、なんでもいいぞ」

そこで何故か少し考えるような、言いにくいようなそんな感じの顔をした。

「別に無理に言わなくてもいいんだぞ」

むしろそんなに言いにくなことをやる俺の身にもなってくれ。

「いや、大丈夫だよ」

「お、おう」

「今夜… 私を溶けるぐらいに… 甘やかして…」

顔を真っ赤にしながらそんな事を言つた圭萌を見て、俺の同棲してから今までもつて
いた理性は、どこかへ消えてしまつたのは言うまでもない。

「本当にいいんだな」

なんとか最後の理性を総動員してそんな事を口にした。こんなことを言つてゐるが、
既に立ち上がりつて目の前の椅子に座つていた（スカートの中は見えなかつた）圭萌の両
肩に手を置いて顔がついてしまいそうな至近距離である。

「うん… いいよ… その代わり優しく… それこそ私が溶けるぐらい… 優しく甘やかしてね…」

この一言で俺もおかしくなったのだろう、圭萌の耳元で囁くように言った。

「わかってるよ。だけど俺の最愛の人が溶けるのは我慢ならないから、溶けないように頑張ってくれ」

恥ずかしさを紛らわせるために言つたけど、自分でも何言つてるかわからなくなるぐらいテンパつてる。混乱してる頭の中で、だけど冷静な部分ではこれからどのように甘やかしてやるのか考えながら、俺は優しく圭萌の耳に噛み付くのだつた。

「はずかしい」

「おいやめろ、思い出すな。俺だつて恥ずかしいんだから」

「だけどハチ君優しかったよ」

「だからやめてくれ」

あれから俺と圭萌は見事に朝チュンした。

第12話

「いらっしゃい」

「いつてくる」

そう言つてハチ君は玄関をあとにした。このあと私も用意して家をでなくちゃ。

今日はハチ君もバイトの先輩とご飯を食べに行くらしいし、久しぶりにハチ君以外の人と夕ご飯で嬉しいような寂しいような。

ハチ君と一緒にいれないのはしようがないし、これから大学が始まつたらもつと一緒にいられる時間が減つてくんだよね。そう考えるとこの長期休暇が一生続けばいいのにと思つてしまふ。いけないことだとわかついていても。

今回の夕ご飯を機会にハチ君と一緒にやなくても寂しくないように慣れなくちゃ。

「しんみりしてもしようがないから準備しよ」

私はマイナスな考えをやめてこれらの友達との夕ご飯のことを考えながら準備を

「ごめん、待たせちゃった？」

* * *

した。

「大丈夫よ、私たちも今来たところだから。それよりも良かつたのかしら、姉さんも一緒に」と

「なんて」

「もうひどいなあ、雪乃ちゃんは。圭萌ちゃんがいいって言つてくれたんだからいいじゃない。それとも私が一緒なのは嫌なの?」

「そんなことないけど、今井さんと姉さんつて初対面でしょ?」

「気を遣わせちゃつたみたいだね。だけど大丈夫だよ、この前陽乃さんに助けてもらつたから」

「そうなんだよ。あの時は助けられて良かつたよ」

「その節はありがとうございました」

「いいんだよ」

「へえあの姉さんがねえ」

「雪乃ちゃんそれはどういうことかな」

「いえ別に何も無いわ。ただ比企谷が不甲斐ないと思つただけよ」

「雪乃ちゃんは比企谷君には厳しいね」

「そんなことないと思うのだけれど」

「ひとまずご飯食べに行きましょ」

「そうね」

「立ち話もなんだしね」

そのあと話し合つた結果、陽乃さんの行きつけのイタリアンレストランに行くことになつた。

食事も終わり、今は食後のデザートと紅茶を頂いているところだ。ミルクティーとシ

フォンケーキのコンビは絶品だね。パスタも美味しかったし今度ハチ君と来ようかな。

「それで相談があつたんじゃないのかしら？」

「そうなの？それならお姉さんも相談に乗つてあげよつかな」

そうなのである。今日のこの食事会は私の相談があつて行われているのです。

話は昨日の昼頃、今日の夕ご飯のお誘いをした時のことまで遡り、

『もしもし、雪乃ちゃん。今電話大丈夫かな？』

『ええ、大丈夫よ』

『少し後から声が聞こえてくるけど…』

『気にならないで。それで何の用かしら』

『明日の夕ご飯どうかなつて』

『別にいいけど、比企谷君はいいの？』

『そのハチ君とのことで相談があるんだ』

『そうなの……ちょっと姉さん待つて…』

『大丈夫雪乃ちゃん』

『ひやつはろー、圭萌ちゃん』

『こんにちはです、陽乃さん。なんで陽乃さんと雪乃ちゃんが一緒にいるんですか?』

一緒にご飯とか食べてたのかな。よく一緒にご飯食べるつて雪乃ちゃんも言つてたからな。

『今日は雪乃ちゃんと一緒に買い物来てるんだ』

『それは邪魔してすいません』

『別にいいよ、雪乃ちゃんの大切な友達だしね。それで明日2人でご飯食べに行くんでしょう? 私も行つていいかな?』

それは願つてもない申し出だよ。相談する相手は多い方がいいしね。それに雪乃ちゃんよりも陽乃さんのほうがいいかも知れないしね。

『はい、こちらこそよろしくお願ひしたいぐらいですよ』

『そうなの。そんな事言われるとお姉さん嬉しいよ。じゃあ行く場所はこつちで決めとくね』

『よろしくおねがいします』

『それじゃあね』

『はい、雪乃ちゃんにもよろしく伝えてください』

電話を切る瞬間に雪乃ちゃんの声が聞こえたような気がしたけど、あんまり姉妹の時間邪魔しちゃ悪いもんね。

とまあこんなことがあつたんだよ。

「それで相談なんんですけどハチ君の事でして…」

「なになに、もしかして同棲することをいい事に毎晩襲つてくるとか?」

「ちょっと姉さん、流石にそれは酷すぎるわよ。幾ら比企谷君でもないわよ」

— そうなんですか、それなんですか

—
??

ありや？ 2人とも何のことだかわかつてない様子だね。言葉そのまま今のことなん

だけどな。

「えつと本当に比企谷君が毎晩襲ってくるの？それなら元部長であり友達でもある私が彼を懲らしめるけど」

「違う違う。そつちじやないよ」

「えつとそれじやあどつちなの？」

「全然ハチ君がしてくれないです」

そうなのである。頑張つて2人で寝るようにはしたけれど、そこから全くと言つてい
いほど進展がなく困つてるのである。

「なるほどねえ」

「私に魅力がないからなんですかね？」

「そんな事ないわよ、ねえ姉さん」

「そうだね。圭萌ちゃんは可愛いし比企谷君だつて大好きみたいだつたしね」

「それならなんでなんですかね？」

「ここ」で雪乃ちゃんは顎に手をあてて、さながら名探偵が難事件の推理をしているような感じになつて黙つてしまつた。

「まあ比企谷君の気持ちもわからぬくないけどね」

「本当ですか、陽乃さん」

「たぶんだけど責任取れないからとかそんな事考へてるんじゃないのかな」

「そうね。あの男だとそれが1番思つてそうなことよね」

「確かにそうですね」

ハチ君のことだから本当にそんな事考へてるんだろうな。私を大事に思つてくれてるつてことなんだけど。

「それでもやつぱり不安なんです……」

「この前から思つてたけど圭萌ちゃん可愛いな」

「ちよつと待つて……」

突然陽乃さんが私に抱き着いてそんなことを言つた。ちなみに隣に座つてたから机

の上には被害がない。

「姉さん。ここはお店の中だし自重してちょうどいい。確かに私も今井さんは可愛いと思うけれど」

「雪乃ちゃんまでやめてよ」

「よし、じゃあ比企谷君をその気にさせる方法を雪乃ちゃんと私で考えてあげよっか」

「そうね、姉さん」

* * *

「それではレツツラゴー」

「ちょっと待つて、陽乃さん。なんでここなのか説明して下さい」

タゞ飯を食べたイタリアンレストランから出て、雪ノ下姉妹に連れてこられたのはランジエリーショップだった。もう8時になるのにまだやつてるんだな、とか思いながらすぐさま入店しようとした陽乃さんを呼び止めた。

「それは、やっぱり比企谷君を籠絡するにはまずランジエリーからだと思つたからよ」

陽乃さんではなく、雪乃ちゃんが先に答えてくれて、それを聞いて陽乃さんが頷いている。

* * *

「さあ行くよ、2人とも」

この人たちに相談して良かつたんだろうかと後悔してきたのは内緒です。

あれ?おかしいな、私の耳には籠絡って聞こえたんだけど……

結局そこで私は、雪ノ下姉妹の言われるままにランジエリーを買い、その場で着けて帰ることになった。

「今日は何かとありがとうございます」

「いえ、いいのよ。これからも困った事があつたら私に言つてね」

「陽乃さんもありがとうございました」

「そのことは気にしなくていいけどさ圭萌ちゃん、あれって比企谷君じやない？」

「ああ、確かにハチ君も今日はバイト先の先輩とご飯食べ……」

そんなことを言いながら陽乃さんが指さした方を見ると、ハチ君と知らない女の人がいた。

「ちょっと待つて今井さん」

雪乃ちゃんが走りだそうとした私の腕を掴んでそう言つた。

「離してよ、早くしないと見失っちゃう」

「そうは言われても無理よ。それに遠目でわかりづらいけどあれは比企谷君のバイト先の先輩よ。今井さんも聞いてるでしょ？」

「そんなの知らないよ、聞いてない。本当にバイト先の先輩なの？」

少し大きな声になつてしまつて雪乃ちゃんが驚いた顔をした。

「今井さん少し落ち着いて。確かにあれは彼のバイト先の先輩よ。少し前に友達と比企谷君のバイト姿を見に行つた時に見たもの」

雪乃ちゃんは嘘をつかないから本当なんだろう。だけどそれならなんで、ハチ君は私には言つてくれなかつたんだろう。

「本当に聞いてないのね？」

そう聞かれて、私は無言で頷いた。

「はあ、それでは彼のミスね。それにしてもめずらしいわね、彼が大事な所を失念するなんて」

「人は誰でもミスはするし、ましてや比企谷君だからね。それに初めて好きな人ができたらからつてのもあると思うよ」

今まで黙っていた陽乃さんがそんなことを口にした。一応陽乃さんなりにハチ君をフォローしてるみたいだ。

「それに圭萌ちゃん、これはチャンスかもしないよ」

「なんですか？」

「この事をネタに比企谷君に迫ればいいんだよ」

「へっ？」

「確かにそれぐらいした方が彼のためかもしれないわね」

雪乃ちゃんまで何言つてるのよ。だけどよく考えたらいいかも知れない。

「わかりました、やつてみます」

「うん、頑張つてね」

「そうね、頑張りなさい。それから結果も教えてね」

サラツと見返りを求める雪乃ちゃん流石です。

* * *

八幡 side

「なるほどな」

なんで昨日、俺が一緒に食事した先輩が女性だつたのを気づいたのか聞いたら単純な話で見たのね。

それにもまさか俺が我慢してたせいで逆に圭萌を不安にさせてたなんてな。

「本当にごめんな」

「何が？」

「いや、不安にさせてたんだなって思つて」

「別に大丈夫だよ。それに昨日今までの分まで甘やかしてくれたから…」

昨日のことを思い出してまだ圭萌の顔が赤くなつた。俺もだけね。

起きてからずっとこれの繰り返しである。どんな会話をしても結局2人して赤面してしまう。

たぶん布団にずっといるからいけないんだろうなあ。

「そういえば下着どうだつた？」

この子本当に天然だよね。自分からまた突っ込まなくていいところに突っ込んでつたよ。

話によると俺のために買ってくれたんだつけ。それだけで嬉しいんだけどね。正直に答えた方がいいかな。

「いや、あのな…」

「もしかして似合つてなかつた？」

「圭萌が良すぎて全然見れる余裕がなかつたんだ」

だから言つただろ、結局2人して赤面するんだよ。圭萌は背を向けちゃつたけど、耳

まで真っ赤だから意味無いのにな。

第13話

「やー、今日も働いた働いた」

腕を真上に伸ばしたらいい感じで音がなつた。
春休みもあと残すところ3日になつた今日この頃、俺は春休み最後のバイトに来て
た。それも今さつき夜の7時をもつて終了した。

何時もだつたらこのまますぐに家に帰つて、俺の帰りを待つてくれているであろう圭
萌と圭萌の作つたご飯を堪能するのだが、今夜は少し違うのである。

すべてはバイトに行く少し前まで遡る……

「花見に行こう」

「なんか言つたか」

「だから、花見に行こうって言つたんだよ」

圭萌が作ってくれたパスタ、ボンゴレビアンコと一緒に食べてたら、圭萌が思いつい
たふうに言つた。てか、完ぺき思いつきだろう。

「いや、俺これからバイトなんだけど」「わかつてるつて」

「じゃあ行けないけど……」

「バイト終わりに行けばいいんだよ」

「バイト終わるの夜の8時過ぎだぞ」

「それも知ってるよ。ハチ君さ、夜桜つてものは知ってるかな？」

「知ってるけど」

知ってるけどなんでそんなに上から目線なんだよ。なんでそんなに胸を張ってるんだよ。やめろよ、俺の視線が1点に集中しちゃうだろ。

「なら話は早い。今夜ハチ君はバイトが終わつたら目黒駅まで来てください」「普通に俺が一旦家に帰つてきて一緒に行けばいいんじやねえの？」

「ちつちつち、わかつてないなあハチ君は」

「いや、何がだよ。少なくとも圭萌の身体は隅々まで知ってるけど」

「う、うるひやい」

赤面しながら囁んだよこの子。囁んだこともあつてさらに赤くなつて俯いちやつたよ。ここにきて庇護欲まで刺激してくるなんて、圭萌まじでつべーわー。

（～）

「いい、ハチ君。この際だから言つとくけど、突然何の前触れもなく変な事を言わない。
いいね」

数分後、復活した圭萌（まだ頬がほんのり赤い）がそんな事を言つてきた。
「ごめんな、そんなふうに言われるとさらになんかやりたくなるんだけど…」

「変な事つてなにかな」

「絶対わかつてやつてるでしょ
「はて？なんのことやら」

たぶん今の俺の顔は凄いニヤけてるんだろうな。

「もう」

「ほら、言つてごらん」

「その……俺の……もの……とか……」

我慢できずに食事中なのに立ち上がりつて圭萌のところまで行つてキスしたけど俺は何も悪くない。いいな、俺は何も悪くない。

（）

「ゴホン、それで何だつたけ？」

「サラツと話を戻そうとしないでよ。なんでハチ君は私を上にのせて座つてるのかな？」

「圭萌が腰を抜かしたからここまで運んできたんだろ」

「それはわかってる。なんで私が抱かれてるのかについて説明を求めてるんだよ」

キスをしてたらいつの間にか夢中になつてそしたら圭萌が突然崩れ落ちたからビッ

クリした。俺が悪いんだけどね。

いや、まてよ。圭萌が可愛いからいけないんだよな。それなら今やつてる所謂あすな
ろ抱きも仕方ないことだよな。Q・E・D・証明終了。

「嫌だつたか？」

「……嫌では……ない……けど……」

「ならないだろ」

「私の心臓がもたないよ……」

さつきまでの声より小さい声だつたけど、流石にこの距離だと聞こえた。あえて聞こ
えないふりをするけどな。

「それでなんで日黒駅集合なんだ？」

「ああ、そうだつたね。なんでかつて言うとデートだからだよ」

「？」

「わからないの？」

「むしろ今の返答で答えられるヤツいるのかよ」

「もうすこしわかりやすく言うと待ち合わせがしたいんだよ」「そうなのか？」

「だけど確かにむかし小町がそんなこと言つてたような、言つてなかつたような……。どうだつたけ？」

「よくわからぬけど圭萌のしたいようにさせるのが正解だよな。」

「わかつたよ目黒駅で待ち合わせな」

「やつたー。ついでにこの体勢もやめよ」

「それはできない。それで目黒駅つてことは目黒川か？」

「そのと一り。よくわかつたね」

「目黒で夜桜と言えばそこしかないだろ。花見をやつたことない俺ですら知ってるから認知度は高いはずだ。」

「2人でいいのか？」

「なにが？」

「いや、俺って花見したことがないからわからないんだけど、花見つて大人数でわいわいやるもんだろ。だから俺と2人だけでいいのかなって」「いいに決まってるじゃん。むしろ2人で以外は行きたくないよ」

やつてしまつた。またいらん事を聞いてしまつたらしい。圭萌が頬を膨らましても怒つてるますアピールしてくるぐらいだし。
だけどね、圭萌さん。その膨らましてくるのただただ可愛いだけだからね。いいこと思いついちゃつた。

「えい」

抱きしめていた手を解いて膨らんでいる頬を潰してみた。そしたら、なんかむかしのタレントがしていたぶりつ子ポーズみたいになつたけど、元がいいから普通に可愛い。
なんか悔しいな。

「私いちおう怒つてるんだけど…」

「悪かったよ。それにそろそろ準備して行かなくちゃ」

* * *

そう言いながら、俺は圭萌を一旦持ち上げて立ち上がり、さっきまで一緒に座っていた場所に座させてあげた。

「ありがとう」

「それじゃあね」

去り際にキスしたら、なんか背中のほうで唸り声が聞こえたけど気のせいだな。

思い出してみたけど、おもくつそバカツプルしてんじやないっすか。つべーわー。

「えっと、確か改札付近で待ち合わせだつたな」

まさかね。あの人気が集まつてゐる所の訳ないよね。ないない。

だけど人だかりの中から出てきた人達が「あの女の子可愛かつたね」とか「だけど人を待つてたみたいだから彼氏がいるんじゃないの」とか聞こえてきたんだけどまさかね。

念のために人だかりの中に入つてみたら案の定いましたよ。なんでベンチに座つてそんなに足を振つて、鼻歌なんか歌つて楽しみな感じ出してるのかな。

それに俺が家出る前に伝えた時間よりも早いのになんでいるの?

おい誰かカメラ持つてませんか?一眼レフカメラ持つてませんか?

ちくしょう、こんなことだつたらあの時カメラ買つとけどば……

てそろそろやめ

ようか。

「あ、ハチ君だ。おーい」

やめてよ。そんなに笑顔で待ちに待つたみたいな顔でこっちに手を振らないで。凄いから、周りからの視線が凄いから。とくに男どもからの視線が。

「わるいな待たせたか？」

「そんな事ないよ、今来たところだしね」

「だけど、俺の伝えた時間よりも1時間早いけど……」

「気にしない気にしない。それよりもなんか言うことあるよね？」

たぶん服装のことだろうな。今日はデニムパンツとシャツの上に青のニットベストか。

「その服装似合つてるぞ。なんと言うか大人っぽくていいな」「ありがと。それじゃあ行こつたか」

言うが早いか自然に俺の腕に抱きついて歩きだした。

「あのー圭萌さん」

「なにかな」

「なんかあたつてるんだけど…」

「あてるの!!」

怒つてるよう聞こえるけどこれたぶん、照れ隠しだな。顔真っ赤だし。そんなになるんだつたらやんなきやいいのに。
えつ？なに？俺も赤いって？
厚着しすぎただけだから。

（）（）

「帰らない？」

「何言つてるのハチ君。まだ来たばつかだよ」

「ここまで人が多いとは…」

「今日、開花宣言されたからね」

その情報は知らなかつた。てつきり俺は開花してて、もう人が少ないもんだと思つた。なのに蓋を開けてみたらこの有り様だよ。

どこ見ても人、人、人。まるで人がゴミのようだ。なあ、目があああああ。

あのシーンつてどうみてもサングラスしてるよね、突つ込んじやいけないかもしけないけど。

「だけどハチ君見てみなよ。夜桜、すつごく綺麗だよ」

「そうだな」

圭萌の方が綺麗だけどな、とかは言うと流石にやばいので自重しました。俺だつてTPOを弁えてるんだぞ。

あれ？ TPOってなんだつけ？芸人だつけ？

「きれい」

そう言いながら圭萌は俺の肩に頭をのつけてきた。

あのー、圭萌さん。気付いてますよね、この周りからの視線。さつきまでも凄かつたけど、今まで數十倍凄くなつたんですけど。

「確かに綺麗だよ」

だけどこんなに嬉しそうにしてる圭萌をみたら何も言えないよね。同意するしかないよね。

帰りに胃薬買って帰ろ。

「そろそろ駅着くぞ」

「うん」

「起こせって言つたからにはちゃんと起きろよ」

初めての夜の花見だったらしく圭萌は帰りの電車の中で寝ていた。

寝る前に起こすように頼まれていたが、あれは簡単に起きないフラグだつたな。

花見をしていた時と同じように俺の肩に寄りかかって寝ているので、横に座つてゐる男

子学生（ぼつち）とか目の前に座つてゐる仕事帰りのおっさんとか居てすごい辛いんだけど、俺の胃が。

あと圭萌には知られたくないし、言いたくもないけどあんまり他の人に寝顔見て欲しくないから寝ないで欲しかったんだけど……。

楽しそうだつたし、はしゃいでいたから疲れたんだろうと思ひ言わないけどな。

それに顔が近いせいか寝息がすごい聞こえるんだけど。それ自体はこの前の圭萌を拾つて持ち帰つた（なんか卑猥に聞こえるけどこの時は何もしてないよ）時になれたけど、たまに聞こえる寝言だと思うけど「ハチクン」とか「ダイスキ」とか、破壊力のすごさは異常。

やめて、もう八幡のライフはゼロよ。

「ほら、着いたぞ」「おんぶして」

電車が最寄り駅に止まって、やばいと思い焦る俺の気持ちが通じたのか、起きてはくれたけどなんかまたとんでもない事言いだしたよ。

だけどこれ聞かなかつたら絶対降りないんだろうな。

「わかつたよ、ほらおぶされ」
「わーい」

寝起きだからこの人、たぶん家の中と勘違いしてるな。この子本当はこんな子じやないんです。だから対面のおじさん、その目をやめて下さいおねがいします。
俺は一人恥ずかしいおもいをしながら電車から降りた。

（）

「今日どうだつた？」

最寄り駅をでて、ちょうど家と駅の中間地点を過ぎたあたりでおぶさつてる人が、てか圭萌がそんな事を言つた。

「起きたのか？」

「今さつきね。それでどうだつたの？」

「楽しかつたに決まつてんだろ」

「決まつてるんだ。そうなんだ」

「俺は圭萌と行くところだつたらどこだつていいんだよ」

「バカ」

これは俺が悪いかもしないけど、だからといつて照れ隠しに首を絞めるのはやめようね。俺が死んじやうから。

その後俺も圭萌も黙つてしまつた。辺りは夜というよりも夜中と言つていいぐらいの時間だからかとても静かだ。

圭萌はどう思つてるかわからないが俺は今みたいな静かな時間も結構好きだ。もともとぼつちやつてたからかもしないが無言の時間は悪くないとと思うのだ。この静寂が続くのも悪くないなあと思つていると、圭萌の方はそんな事思つてなかつたのかこの静寂を破つてしまへりだした。

「ハチ君」

「ん」

「今夜さ、久しぶりにしようつか？」
「ん？」

言いながらさつきまで少し背中に触れるくらいだつたのに、思いつ切り引つ付いてきた。

「だから最近してなかつたでしょ？」

「何をだよ。ちゃんと言わんとわからないな」

「ニヤニヤしてるから絶対気づいてるでしょ」

「はて？ なんのことやら」

「わかつたよ」

そう言うとスーサースーハー深呼吸しだした。可愛いな、本当に。1つ残念な事を挙げるとおんぶしてやせいで顔が見えないことだな。

「私を食べてください」

「畏りました、お嬢様」

そこからいつもなら15分かかる道を5分で帰つたのは、後日圭萌から言われて初め
て気づいたことだつた。

第14話

2年目の大学生活が始まつてはや2週間がたつた。

圭萌とは別の大学なので一緒に大学生活が送れなくて残念に思つたこともあつた。俺はそれでもすぐに割り切つたけど、圭萌が結構後悔してるんだよな。こんなことなら一緒に大学しとけば良かった、てな。

それでも2人で、できるだけ時間割りを合わせて授業が終わつた後に一緒にいられるようにしたんだけどな。

それに授業後にだけ会えるつてのもそれはそれでいいと俺は思うんだけどね。放課後デートって男なら憧れの1つのはずだし。少なくとも俺はそう思います。

この事を圭萌に伝えたら「そうなの?」という言葉とともに疑いの目をむけられたけどな……なんでさ。

そんな中で火曜日だけは、俺の方が2コマ分早く終わつてしまふので暇を持て余してることが多い。

今日はその火曜日にあたるのだが、俺はめずらしく食堂に来ていた。俺の通う大学の

食堂は高くもなくかといつて美味しいものがあるわけでもないんだが、紅茶がやたら旨いんだよな。

それを知つてからというもの、俺は偶に食堂で紅茶を飲みながら読書をすることにしてる。

今日はどんな本持つてきたつけと思いカバンをガサゴソしていると、

「せーんぱーい」

という声が聞こえてきた。

誰だよ全く、せつかく生徒の少ない時間帯で食堂全体が静かなのに。これだからパリピは……

「先輩つてば、ねえ」

誰だよ先輩。早く返答してやれよ。そして早く黙らせて静かな食堂に戻してくれつて。つと、あつたあつた。今日はツンドラなヒロインがでてくる本を持ってきてたのか。

この本読んでもると雑談の大切さがわかるよね。個人的にはエロインとの雑談が大好きです。

「いつまで無視するんですか」

「ひつ」

何この子、俺の陣取っていた机をバンって思いつ切り叩いたよ。やめろよ、驚くから。この時俺は足下のカバンを見ていたから本当に気づかなかつた。だから驚いて変な声が出た。普通だつたらこれぐらいじや驚かないし、変な声もでないから。本当だからな。

「久しぶり合つたというのにキモい声をあげないでください」

いや、ひでえこと言いやがるなこの人。確かに反応しなかつた俺も悪いかもしねないけど、9割方そつちがいけないと思うんですけど……

そろそろ返答しないとさらに罵倒されそだから返答するとしますか。

「久しぶりだな、一色。なんでこんな所にいるんだ？」

「この見るからにふんわりした感じの男子受けが良さそうな服に身を包んでる女の子は、皆さんご存じの一色いろはその人だ。

「決まつてんじゃないですか、わたしがここの大學生だからですよ」

「いやいや一色さん。冗談はほどほどにしておいた方がいいですよ」

「もー、酷くないですか先輩。冗談なわけないじゃないですか。なんなら学生証でもみますか？」

そう言いながら俺の対面に座り、自分のカバンをあさりだした。

なんで勝手に座つてるのかな？百歩譲つて座ることはいいにしても、なんで俺の対面にわざわざ座るのかな。

あとカバンの中を探す時に、垂れてきた髪を耳にかける仕草はあざといからやめた方がいいと思います。

だけど今度圭萌にやつてもらおうかな。圭萌がやつたらきっと可愛いんだろうな。てか、圭萌だつたら素でやりそうだよな。

「ありましたありましたって、なにぼーっとしてるんですか先輩。あ、もしかして私に見蕩れてたんですか。ごめんなさい、声に出して言つてくれないんで無理です」

「見蕩れてねえし、なんで俺がふられてるんですかね」

それに今の口ぶりだと俺がここで告白したら了承してくれそうな感じなんだけど……

いいのかよそれで。いや、まあしないけどね。俺には圭萌がいるしな。

「そんなことよりこれで認めてくれますよね?」

「俺がふられたことをそんなことで片付けるなよ。へえー、本当にこここの学生だつたんだな」

「わかつてくれましたか。それにこの顔写真見てくださいよ。我ながらよく撮れると思うんですよね」

「流石俺の後輩は自分褒めをサラッといれてくるな」

「…俺の…後輩…つて…」

「なんか言つたか?」

この距離で聞こえないとかどんだけ小さい声で喋るんだよ。

「何でもないですよ。それにこうでも言わないと先輩褒めてくれなさそうなんでもうん」

「むしろそれを言うことによつて、俺から褒められない可能性をけしてることに気付けよ」

だけど俺の顔写真と比べたら一色のやつはすごいよく撮れてるな。俺のなんて小町に「手配書みたいだね」とか笑顔で言われてハートブレイクしたんだぞ。自分でも思つたから別にいいんだけどね。

「それで一色、俺に何か用があるのか?俺はこれからここで読書に勤しむんだが」「用事は今の一緒の大学なんだよつていうサプライズがそうなんですけど。なんか反応がうすくて、わたし悲しいです」

よよよとか言いながら目元を隠して泣きまねされても困るんだけど。あとそのよよ

よつてところがあざといを通り越して若干ウザいから。

「悪かったよ。これでも結構驚いてるんだぞ」

「本当ですか？」

「本当だよ」

「よかつた。それじゃあ行きますか」

「は？」

「ほら、カバンに本をしまって立ち上がつてください」

「いや、なんでだよ？用事は終わつたんじやなかつたのかよ」

「せつかく久しぶりに会つたんですし、荷物持つ：じやなかつたお買い物しましようよ」

「おい、今荷物持ちつて言いかけただろ」

「そんなわけないじやないですか」

「拒否権を行使したいんだけど：」

「あると思つてるんですけどか」

「ですよね～」

りで俺的には安心しているけど、こいつは俺なんかと一緒に居ていいのかよ。

「先輩また変なこと考えてますね」

「何言つてんだよ」

「別に隠さなくてもいいですよ。どうせ俺なんかと居ていいのかとか考えてたんですよね」

「そんなわけないだろ」

「別にいいんですよ。それに大学では先輩嫌われてないじゃないですか」

「は？」

それこそ何言つてんだよ、この子は。俺が大学では嫌われてないだと。そんなわけないだろ。

そもそも俺は誰ともしゃべらないけど、しゃべりかけられもしないんだぞ。

それになんか女子たちが俺のほうを見て、ヒソヒソしゃべってるのを俺は知ってるんだからな。俺が見るとすぐに目線をそらすし。あれ、本当に俺つてば嫌われすぎじゃね。

「あー、それは勘違いだと思うんですけど…」

「いや、それはないだろ。俺ほど周りのことがみえていて、空気の読めるヤツなんてなかなかいないからね。空気読みすぎてそのままフェードアウトするまである」

「まあ勘違いのままでも敵が減るからこちら的にはいいんですけどね」

「なんだよ、敵が減るつて」

一色は大学に進学してとうとうなにかと戦うようになつたのか。そんなわけないだろうけど、それにしても何の話だ?

「気にしないでください。先輩には関係ありますけど、知らなくていいことなので
「なにそれすごく気になるんだけど」

「この話はここまでにして、ほら行きますよ」

言うが早いが一色は俺をおいて食堂の出口に向かつてしまつた。俺をおいていつて良かつたのかよ。あいつは俺が逃げるとか考えないのか。

逃げたら逃げたで、今度会つた時が恐いから行くけどさ。

それにしてもせつかくの紅茶どうしてくれるんだよ…

（））

「おい、待てって。少しは先輩をいたわってゆっくり歩け」
「すいません。つい嬉しくて」

食堂をでてすぐのところで一色をなんとか呼び止めた。どこに行くかすら聞かされてないのに、おいてかれたら流石に困る。

それと今突然デレたけどこれに関してはスルーで良いよな、一色も自分で言つたくせに気づいてないっぽいし。

「それでどこ行くんだよ」

「駅前ららぽーとでいいですか？」

「別にいいぞ」

そこだつたら電車で帰つてくる圭萌を、すぐに迎えに行けるから願つたり叶つたりだな。

「それじやあ行きますか」

そう言いながら、一色は校門のほうに向かつて歩きだした。俺もそれについて行くよう歩きだした。

ちなみに俺が通つてる大学は駅までそれほど離れてるわけではなく、歩くとだいたい20分かかるぐらいの距離である。

そしてもう一つ言うと、1週間のうちに木曜日だけは圭萌のほうが2コマ分早く終わるので、いつも遠慮してんんだが俺の通つている大学まで来ることがある。

「おーい、ハチくーん」

わーい、なんで圭萌さんがここにいるのかな？これから起こるであろうことは俺でも

わかるよ。修羅場だよね。

ところかわつてららぽーとの中にある喫茶店である。
メンバーは俺と一色と圭萌の3人で、俺と圭萌が隣合わせで俺の対面ではなく圭萌の

対面に一色が座っている。

なぜそこを選んだんだよ、一色さん。そんなに俺が嫌なのか。
ここまで道中は俺がいるのになんか2人で喋っていて、俺だけが後ろから黙つてつ
いて行く感じだつた。仲良くなるの早くないですかね？俺的には修羅場にならなくて
良かつたけど。

両方ともコミュ力の塊みたいなもんだから結構早く仲良くなれたのかもな。

「あ、ハチ君ここまで来てもらつて悪いけど席外してもらえないかな？」
「いいのかよ？」

「大丈夫だよ。もう自己紹介したから」

確かに仲良さそだつたからいいか。それに女の子だけで話したいことでもあるん
だろうな。

「わかつたよ。すぐその書店にいるから終わつたら連絡してくれ」

圭萌 side

「先輩にこんなに美人な許嫁がいたなんて知りませんでしたよ」
「私こそこんなに可愛い後輩がハチ君にいるなんて知らなかつたよ」

私は今日たまたま授業が休講になつたため、ハチ君を驚かせてやろうとハチ君が通つ

ている大学に来てみたら逆に私が驚かされてしまった。またもやハチ君が知らない女の子と一緒にいたからである。

それでも私は流石に学んだので、たぶん今回もただの知り合いだろうと思い、思い切つて一緒にいた女の子であるいろはちゃんに聞いた。

そしたら案の定高校の時の後輩で、大学も一緒になつたのを今日初めて知つたので、お買い物に誘つたということまで聞き出した。

ここまで聞いた感じだと、なんとなくだけどこの子も雪乃ちゃんと同じでハチ君のことが好きだったのか、今も好きなのかのどちらかなんだよね。

「わたし、今井先輩にお礼を言いたいんです」

「なんでかな?」

「たぶんお気付きだと思いますけど、わたしは比企谷先輩のことが好きでした。ですが、雪ノ下先輩たちがふられたことを聞いて、わたしでは無理だと諦めようと思つていたんです。だけど今日、また比企谷先輩と会つたらその決心も揺らいじやつたんです。ですけどこんなに美人な許嫁がいるならスパッと諦められます。なのでありがとうございました」

「本当にいいの?こんなこと言われるのは嫌かもしれないけど後悔するとと思うよ」

「いいんですよ、本当に。それに今井先輩が来た時、比企谷先輩すごく嬉しそうな顔しました。あんな顔今まで見たことありませんでした。あんな顔見せられたら諦めもつきますよ」

「この子はいい子なんだな。私を素直にそう思つた。そして同時に誇らしくも思つた。こんなすごい子に好かれるなんてハチ君はすごいなつて。

それにこの子となら私も仲良くなれるような気がした。

「そうだ、今井先輩。今は比企谷先輩を待たせてるのであんまり喋れないんですけど、今度また一緒におしゃべりしましようよ」

「そうだね。私も大学でのハチ君のこととか知りたいし、いろはちゃんとも仲良くなりたいから」

「それじゃあ連絡先交換しておきましよう」

「そうだね」

「それと比企谷先輩のことアドバイスなんんですけど……」

後輩の子からアドバイスもらうのってどうかと思うけど、ハチ君のことならもらつて

おいて損はないよね。

「どうしたの？」

「比企谷先輩つて今井先輩には大学生活のことなんて言つてるんですか？」

「ぼつちだとか言つてるけど……もしかして違うの？」

「当たらずも遠からずですかね」

「どういうことだろ？ 当たつてることはぼつちなんだけど、実は違うつてことだよね。よくわからないよ。

「ですからね、比企谷先輩つて結構かつこいいじやないです」

「そうだね」

「それによく人助けもするんですよ」

「そうなの？」

これはなんとなくだけ知っていた。雪乃ちゃんからも同じようなことを聞いたことがあるし、私に対してもぐく気遣いができるからそうなんだろうなとは思っていた。

「その結果どうなると思います?」

「モテるだろうね」

「そうなんです。早くもわたし達新入生の間でも噂になるぐらい人気なんですよ。そのおかげでわたしも比企谷先輩が同じ大学だつて知ることができたんですけど……」

「だけど、ハチ君はぼつちだつて言つてるんだよ?」

そこが私からしてみたら謎なのだ。私もよくハチ君のことを目でおつてている女子高生とか見るからモテることはわかつていたけど、本人はぼつちだつて言つっていたからずつとわからなかつたのである。

「比企谷先輩つて結構話しかけるなオーラ出してるんでみんな近づけないでいるんです。だから比企谷先輩は気付いてないと私は思います」

「なるほどね」

たぶんだけど、その話しかけるなオーラつてのもハチ君自身は意識してやつてるわけじゃないんだろうなと思う。

「ですけど、安心はしない方がいいですよ。ここからがアドバイスなんんですけど、今井先輩のしてるネットレスって確かペアルックがあるやつですよね。それを比企谷先輩にもプレゼントしたほうがいいですよ」

「牽制になるつてことね」

「そうゆうことです。それではわたしはここらへんで」

「アドバイスありがとね」

「いえいえ。またお話してくださいね」

そこでいろはちゃんとは別れて、私はハチ君のところに向かう前にネットレスを買いに行くのだった。

第15話

「ごめんね、遅くなつて」

「いや、大丈夫だぞ」

そう言いながら、俺は立ち読みしていた雑誌を棚に戻した。
ちょうど圭萌と一色と別れてから1時間たつたぐらいである。俺が思つてたより早く合流できた感じだな。

「連絡してくれたら俺からそつちに向かつたのに…」

「ごめんごめん、忘れてたよ」

忘れてたつて…。まあいいけどさ。

「圭萌1人なのか？」

「いろはちゃんは先に帰つたよ。ハチ君によろしくつて言つてた」

「そうか」

自分から誘つたくせに俺とは全く関わらず勝手に帰るなんて…… 変わつてないな、あいつも。

「それにしてもハチ君にあんなに可愛い後輩がいたなんて知らなかつたよ」

「一色本人から聞いてると思うけど、高校の時に少しいろいろあつてな。それと可愛いんじやなくてあざといんだよ」

「あれは可愛い後輩だと思うよ。だつてハチ君に懐く後輩なんていろはちゃんとぐらいだつたんでしょ」

「サラッとひどい」と言うよね」

その通りなんだけどね。だけど、あえて言うなら懐かれてたつてよりは弄られてこき使われてたのほうが正しいけどな。

「それよりもそろそろ行こ」

「おう」

めずらしく圭萌から手を出してきたのでそれに俺は手を絡めて歩きだした。て、どこに行くんですかね？

その後、いつもだつたらぶらぶら歩きながらウインドショッピングするところなのに、今日はめずらしく圭萌が早く帰りたいと言つたので、いつもよりだいぶ早い帰宅となつた。

それによりいつもなら2人ともまだ夕食の片付けをしてる時間なのに、2人とも風呂をすましてしまいあとは寝るだけの状態になつた。

流石に寝るのには早すぎるので、リビングで読書しているのだが……。

さつきからずっと見られてるんだよな。誰からだといえば、言わずもがな圭萌なんだけど。ここで逆に圭萌じやなかつたら選択肢的には幽靈ぐらいしか残らないんだけど。それはないのでここは圭萌一択である。

圭萌のほうはたぶんバレてないと思つてるんだろうな。チラチラ視線を向けたり、紅茶を飲むふりして見たりなどしてくるけどそれでは俺じやなくともバレる。

それにしてなんで見られてるんだ？俺なんかしたつけか。風呂に入つたばつかだからなんか変つてことはないと思うんだけど。目に関しては諦めてもらうしかない。1人悩んでもしようがないし本人に聞いてみますか。

「どうしたんだ、圭萌」

「なにが？」

「しらばつくれるなよ。さつきから俺のこと見てただろ」

「バレたの」

「あれでバレなかつたら、相手はたぶんアホの子だぞ」

一瞬頭にお団子頭の女の子が浮かんだけど気のせいだな。

「実はハチ君にしてほしいことがあってね」

「なんだよ」

「これをつけてほしいんだ」

そう言つて渡してきたのは、見覚えのある紙袋だった。これつてまさか、

「俺が圭萌にあげたネックレスのペアルックの片割れか」

それは俺が初デートの時に買ってあげたネックレスのペアルックの片方だった。その時は流石に自分で買うのは恥ずかしくて断念したんだけどまさか圭萌から貰えるとは。

「それでつけてくれるかな？」

「当たり前だろ。つけるなって言われてもつけるよ」

人からの贈り物つてこんなに嬉しいんだな。それはまあ誕生日プレゼントは貰つことあるし、嬉しいとも思うけどなんて言うのかな。なんでもない日にプレゼントされるつてのも嬉しいことを初めて知ったよ。

「うれしい。私がつけたいんだけどいいかな？」

「おういいぞ」

嬉しそぎて頭の中パーティーしてたらなんか許可しちやつたけどこれやばい。

ちよつと待つて圭萌さん、なんで前からつけようとしてるのかな。確かにソファーに並んで座つてたから後ろにまわるより前からのほうが楽かもしれないけど、前からだといろいろやばいからやめてくれ。

「う… ううん… 手が… 届き… にくい…」

だつたら後ろにまわろうよ、マジで。てかなんで耳元でそんなに甘い声だすんだよ。なにこれ誘ってるの。

「よしききたよ、ハチく・：うわつ」

やつとのことでネックレスを俺につけることができて、安心したのか俺の膝の上にのつっていたところから、体勢が崩れて俺に抱きつくような姿勢になつた。

そこで俺は我慢の限界がきた。というか我慢を超えた。むしろここまでよく耐えたと言つてもいいだろう。風呂あがりのいい匂いや体の柔らかさとか声とかよく耐えたと。だから俺はわるくない。あれ、これこの前も言つたような……

「ネットクレスありがとな。これから毎日大事につけさせてもらうよ。圭萌が安心できるようにな」

「え、なんで」

「気付かないわけないだろ」

「はう」

なんとかなけなしの理性で今のうちに言つておかないといけないことは言えたな。
結果としては圭萌の恥ずかしがる姿を見て更にやりたくなつたから言つてよかつたと
思つてる。

「圭萌、俺からのお願いもきいてくれるよな」

「できることなら…」

「それじやあさ、圭萌のすべてを俺にくれ」

「…もうあげてるよ」

耳元で俺が囁くと顔を真っ赤にさせた圭萌がそう弱々しく返してきた。

「可愛いこと言うなよ…」

第16話

「映画を観に行こうよ」

GWの初日の朝。圭萌の作ってくれた朝食を食べて、俺が淹れた緑茶を2人で飲んでいたら圭萌が突然言つた。

わりといつものことなのでもう驚かなくなつたけど、また突然だな。

「なんでもまた？もしかしてこの前テレビで見たあれか？」

「たぶんそれのことだよ。だから早く準備してね」

「俺の同意は聞かないんですね」

俺の言葉なんて聞かず湯呑みを片付けに行つてしまつた。別にいいけど。

この前テレビでやつていた恋愛系の映画の特集を見ながら、圭萌が「観に行きたいなあ」と呟いていたのである。

ちゃんと聞いていて覚えていたよアピールで言つたけど、圭萌には通じなかつたみたいだな。

冷静に考えてみるとあざとかつたかな、と考えていると先に準備しに行つたと思つて、圭萌が俺の方に寄つてきた。寄つてくる事はよくある事だけどなんか近いな。いつもだと肩が触れるぐらいなんだけど、今はなんか俺に寄りかかっていると言われてもおかしくないくらい密着してゐんですけど。

とか、冷静に考へることで俺の内なる欲求と戦つているとそれを知つてか知らずか俺に更に近づいてきた。いやまじで近いんですけど。これから予定を潰さないために俺は本気で我慢してゐるのに・・・・たぶん、素でやつてるんだろうなあ。

「憶えててくれて、ありがとね」

それだけ言うと圭萌はすぐにどこかへ行つてしまつた。きつと今度こそ自分の部屋に準備しに行つたのだろう。

そんなことよりいつの間に耳元で囁くなんて技、覚えたんだよ。

前回お前自身が彼女相手にやつただろうつて。そんなのは知らん。てか、もう3ヶ月のことなんて誰も覚えてないだろ。話の中では数日前のことだけだ。

バカなこと考えてないで顔でも洗うか。顔を洗うことで赤くなつた顔を戻せるとい
いけどな。

* * *

ところ変わつて映画館である。映画は結構連休などに合わせて上映されることが多く、例えば夏休みがある8月などは子ども向けの映画多かつたりする。黄色いネズミが出てくるやつとか、戦隊ものとか、ライダーものとかいろいろいろいろ。それらは子どもだけでなく一緒に見に来る親も楽しめるようになつてたりするものである。

なので俺が昔、一人でプリティでキュアキュアなアニメの映画を見に行つていたのだつて至つて普通のことである。

「どうかしたの、ハチ君。なんか遠い目をしてるけど」

「いや、ちよつとな。この人の多さで関係ないことを考えてしまつただけだ」

そうなのである。人が多のである。本当はさつきの映画館の話の終着点は、人が多いつてところだつたのにいつの間にか自分の悲しい過去を振り返るハメになつてしまつた。それだけ人が多いということで許して欲しい。

それにしても本当に多いな、折角のGWぐらい家の中にいろよ。俺は声をだいにして言いたいね。

「それって結構な感じでブーメランだと思うけど・・・」

「それを言うなよ。そしてサラツと俺の思考を読まないでくれ」「えっと、さすがの私でもいつでもできるわけじゃないよ」

今のは聞かなかつたことにしよう。そうだな、それがいい。そしてこれ以上踏み込まないためにも、全力で話を逸らすか。

「それに今のはハチ君自分で言つてたよ」

「おい、まじかよ。だからさつきの女子高校生はこつちを見ながらヒソヒソ話していたのか」

「それは理由が違うと思うけど・・・」

話を逸らした結果、圭萌が腕に抱き着いてきた。何を言つてるのかわからないかもしれないけど、安心しろ俺もわからない。

「あのー、圭萌さん」

「ん？」

「なんで突然腕に抱きついてきたんですか？」

「察してよね」

「それならなんで腕を絡めたままチケットカウンターとは逆方向に向かつてるんですかね」

話しながらもずんずん歩いていた圭萌が一瞬こつちを振り向いた。そこには笑顔があつた。ただし、目が笑つていなかつたが。

そこから俺は腕を絡めたまま館内を歩き回つたのであつた。

* * *

なんとか圭萌の機嫌を直してもらい、その後席を取つて飲み物とポップコーンを買い込んで今は上映を待つていて。時間的にはそろそろ暗くなつて、映画の本編が上映される前に流れるCMが始まるつてところか。

あのCMつて結構長いよね。これについてはいつももなら少数派に属する、というかいつもはボツチな俺が珍しく世間と同じ考え方だと思うんだよな。

ここからは独自の考えなんだけどたぶん暗順応に関係してると思うんだよね。だからみんなもいくら早く映画の本編が観たいからつてCMぐらいで怒らないでね。お兄さんとの約束だぞ。

おつと、また話が脱線してしまつた。俺は別にCMなんてどうでも良くてこの時間を使つてしまいたいことがあつたのだ。

「なあ、圭萌。1つ相談があるんだけどさ、俺と席の場所変わんない？」

「なんで？」

「いや、ほら、俺の座つてる席つて通路の横だろ。もしも、なんかあつた時すぐに逃げられるようになつちの方がいいかなって」

「まあ、そういうことなら別にいいけど」

そして俺と圭萌の席を交換した。あとは圭萌が何も気付かずに、上映が終わってくれるのを願つていた俺だったが、

「ハチ君もちゃんと嫉妬してくれてるんだね」

という一言でバレてしまつたことを悟りながらもあまりの可愛さと映画館特有の暗さもあつていろいろやつちやつたけど俺は何も悪くないよね。

「ねえ、ハチ君」

「なんだ」

「映画を観終わつたあとは、普通のカツプルならどうだつたか感想を言い合つたりする
んだろうね」

「そうかもな。てことは、俺らは普通じやないつてことだな」

「もう、ハチ君のばか」

「痛い痛い、腕をぽかぽか殴るのをやめなさい。それに圭萌だつてまんざらでもなかつ

たじやんか

「うつ」

「顔が赤くなつてゐるぞ」

「ハチ君だつて」

第17話

知つてゐる天井だ。当たり前か。

だけど、いつもとなんか違うんだよな。なんでだろうか。そんなことを考えながら、横を見るといつもはいないはずの人がいた。

皆さんご存知かわいい俺の許嫁である。これを言うと圭萌は嫌な顔をするかもしれないけど、何でこんなことになつてゐるんだろうな。別に嫌つて意味じやない。むしろこんな素晴らしい人の許嫁が俺なんかでいいのかつてことである。絶対本人には言わないけど。無駄に気を遣わせたくないし。最近忙しそうにしてるしな。

「だからか……」

おつと、声に出てしまつた。圭萌は起きてないようだから良しとするけど。このたまに起きる無意識に考えてることを喋つてしまふの直さないとな。またこの前と同じミスをするわけにもいかないしな。

話が逸れたな。最近、圭萌は大学のほうで忙しいらしく昨日の夜も金曜日だからか俺

の作つた飯を食つたらすぐに寝てしまつた。別に寂しくなんてなかつたんだからね。ごめんなさい、だいぶキモかつたわ。

それで俺の感じたいつもの朝と違うところつていうのは、朝ご飯のいい香りがしないことである。朝ご飯はいつも圭萌が作つてくれており、俺はその香りを嗅ぎながら起きるのが日課になつていた。

今日は土曜日であり、社畜の中でも選ばれしものは働いているかもしれないが、ありがたいことに学生の身である俺たちは休日である。なので別に無理して朝ご飯を作らなくともいいのである。それでも先週までは頑張つて俺より早く起きて作つてくれたが。

ここまで話すと俺が圭萌の疲労を知りながら、それでも無理させて朝ご飯を作らせてるようを感じる方も多いと思う。それは勘違いだと言つておこう。俺は朝ご飯作りを代わろうかと言つていた。だが、圭萌はなぜか代わろうとしなかつたのである。むしろ若干怒つていたのである。いまだに理由がわからないけど、そんなことがあり俺は渋々ながらも引き下がつたが流石に限界をむかえたらしい。

聰明な方々なら俺がこれからすることはもうわかっているかも知れないがその前に、

「寝顔を観察しよう」と

俺が起きてからもうそろそろ1時間が経とうとしている。時間が経つのって早いの
な。

もうこのまま圭萌の寝顔を見ながら午前中を過ごそうかと思ったが流石に断念した。それにそのうち圭萌も起きるしな。

俺が起きたのはどうやら6時ぐらいだつたらしくまだ7時である。休日のこの時間は普段の俺だと寝てるのでなんか新鮮なんだよな。

それにこんな時間に起きられるなんて奇跡に近いと思うんだが。俺はあんまり神様とか信じないんだけど、これは頑張っている圭萌に朝ご飯を作つてやれっていう啓示かね。

とか、碌でもないことを考えながら冷蔵庫の中を漁つてみる。

そういうえば、世の奥様方は旦那が冷蔵庫を漁るのがウザいと思うこともあるらしい。ソースは親。その点、俺たちは2人とも料理をするのでそんなこと思われてないはず・・・・ないよね？

「だいたいのものはあるな。ひとまずサラダでも作りますかね」

バイトで偶に料理もしておりそのおかげで、それなりに料理もできるようになった。レシピを見ないで作れるのカフェ飯ばつかだけど・・・・

それでもこうして危なげなく包丁を使えるだけバイトしていく良かつたと思えるけ

ど。

ちなみにサラダは基本的なものであり、レタスを食べやすい大きさに切つてそこに同じく切つたキュウリや人参を入れて、あとは冷蔵庫にでもしまつておく。

「よし、こんなもんだろ」

あとはクルトンと粉チーズと温泉卵をのつければ完成だな、と思いながらクルトンを探すためにキッチンの棚を漁つていると、そこにはこの前バイト先で貰つたフランスパンを発見した。

フランスパンは俺も好きだが、圭萌も好きだつたはずなのでこれを使わない手はないな。

それはいいんだが、今更なんだけど朝からシーザーサラダつていいんかな。俺的には大丈夫だけど圭萌的には宜しくないかもな。その時は俺が食べればいいかな。

「フランスパンであれを作るの初めてだけど、さてさて上手く作れるといいんだけど」

「きやあああああ

フランスパンを切つていたら寝室の方から悲鳴があがつた。いつもならすぐにでも駆けつけると思うけど、今回は俺の予想なら悲鳴をあげた本人様がすぐに来ると思わ

れ。

俺の思つた通り寝室のドアが思いつきり開かれて焦つた顔の圭萌が出てきた。

「ごめん、寝坊しちゃつた」

「大丈夫だから落ち着けつて」

「でも、朝ご飯とか」

「それならもうすぐできるから座つてていいぞ」

「でも・・・手伝うよ」

「大丈夫だつて。それにいつも作つてもらつてるからな。偶にはゆつくり朝のひと時を過ごしてくれ」

その後なんとか説得して、リビングで待つてもらつてているのだが・・・・なんか後ろから視線を感じるんだよなあ。視線の主は一人しかいないんだが。むしろそれ以外だと俺がやばいヤツになつてしまふので圭萌一択でファイナルアンサーなんだけど。圭萌に見られるのはいつもなら嬉しいんだけどなんだろう、少し緊張するんだよな。この部屋の作り上しようがないことなんだけど、本当ならキッチンからリビングが見渡せたらいいんだけどね。

そしたら圭萌がどんな顔で見てるのか分かつたんだけど。そしてそれをエサに弄つたのに。

そんなことを考えていたら、後ろから足音が聞こえてきたので振り返つたらなぜか抱き着かれた。

「何してるんですか」

「ごめん、私の予定だと背中に抱き着くつもりだつたんだけど」

「それはまあそうなんだろうと思うけどそつちではなく、なんで抱きついてきたのかの理由を教えていただきたいのですが」

「手伝おうと思つて？」

「なぜに疑問形。そして手伝うのと抱き着くのが俺の中ではイコールで結びつかないんだけど」

「私も行動に起こしてから思つたけどよくわからなかつたから疑問形にしたんだ」

「なるほど。いや、納得できないんだけどね。それにこのままだと料理が進まん」

「そうだね。それなら私にも料理手伝わさせてよ。それがダメなら離れないからね」

「さすが圭萌だな」

「エへへ」

「だけどその選択肢だと俺は料理をほつたらかして圭萌を取るかもしれないけど」「えっと、まさかハチ君そんな訳ないよね。それにここまで作ったのに勿体ないよ」「わかつてるって、嘘だよ嘘」

「それじゃあ」

「ああ、手伝ってくれ」

「やつたね。それであとはなに作るの」

「フランスパンを使ったフレンチトーストだな」

その後は、

「それなら私は卵を溶いておくね」

「それなら俺はフライパンの焼く準備しておく」

2人で手分けしてフレンチトーストを焼く準備をしたり、

「あっ、ごめん」

「ハモつたね」

「そうだな」

調味料を取ろうとした時に手が触れてハモつてしまいベタなことしてしまったり、

「いい匂いだね」

「いい匂いなのはわかるけど、俺の背中に覆い被さる必要は無いよな」「初めてあつた時も思つたけどやつぱりここは安心するなあ」

フレンチトーストを焼いてる時に危うく俺がまた落ちかけたりいろいろあつたが、

「できたね」

「おう、我ながらうまく出来たと思う」

「それじゃあ食べよー」

無事にフランスパンで作つたフレンチトーストとシーザーサラダはできたのだつた。
1つ反省するとするなら、

「ちょっとまつていつの間にかもう9時じやん」「思つたより時間がかかつたな」

ことある事に遊んでいたためいつの間にか調理開始から2時間が経過してしまつて
いた。

第18話

「今日は何の日でしょーか」

日曜日の昼下がり。こんな日はリビングでゆつたりと読書するのが1番である。そんなことを俺が提案したら圭萌がいつの間にか2人分の緑茶を用意してくれた。選ばれたのは綾鷹でした。

そしてソファーアーに並んでそこから2人でまつたり読書タイムだつたのだが・・・いつの間にかソファーアーの上で圭萌が膝を抱える姿勢で俺が胡座をかけて背中合わせで読書しており、それからさらに少し経ち冒頭の圭萌セリフである。

どうやら圭萌は本が読み終わつてしまつたようだ。それなら新しい本持つてくれればよかつたのに。

俺はまだ本が読み終わつてないので、読み途中のページに葉を挟んだ。俺は話しながら読書できるほど器用ではないし、それに好きな人の話を片手間で聞くほど酷い性格はしてないしな。そんな事言つても背中合わせだから話すのにはあんまりよろしくないんだけど。

「えっと、今日つて6月12日だよな」

「そうだよ」

「6月15日ならわかるんだけど」

「正解には関係ないけど言つていいよ」

なぜに上から目線なんだろか。質問者だからか。クイズ番組でいうと司会者だからか。でも、司会者つてそんなに上から目線じやなかつたような。まあいいか。

「6月15日は千葉県民の日だぞ」

「へえー、初耳なんだけど。そもそもなんでそんなこと知つてるの?」

「千葉県民だからに決まつてんだろ」

「決まつてるんだ」

「それに千葉県民の日は千葉県の多くの施設や観光地で割引があるぞ。有名どころだとマザー牧場とか県立博物館とかな」

「そうなの。じゃあ行かなきやね」

背中越しでも感じこのいかにも楽しみですみたいな感じ。はつきり言つてかわい

いです。だが、俺はあえてそんなかわいらしい圭萌を絶望させなくては。

「ウキウキしてるところ悪いんだけど、割引になるのは子どもだけだつたはずだぞ」「えつ、そうなの」

「だから俺たちが行つても普通料金になると思うぞ」

「だけど待つて。これから先その子どもだけの割引が続いたとして、私たちは普通料金でも私たちの子どもと行けば私たちの子どもは割引されるね」

「そーだなー」

「なんか反応が素っ気ないな」

「いやなんというか、ちゃんと子どもを作るつもりがあるんだなと思つて」

「もしかしてハチ君はないの」

「そんなわけないだろ」

「本当かな」

「昨夜のことを思い出してみれば信じてもらえるけど」

背中から温もりが消えたと思ったたら、近くにあつたと思われるクツショーンに顔を押し付けていた。他人が悶えるところとかあんまり見る機会ないけど、かわいいのは圭萌だ

* * *

からかな。
ひとまず、質問者が戻ってくるまでお待ちください。

なんとか復帰した圭萌はさつきまでと同じふうに俺の背中に自分の背中を合わせて
きた。ここでさらに弄るのは簡単だけど、さすがに可哀想だし話が進まないのでここは
スルーだな。

「話が逸れたな。それでなんだつたつけ」

「今日は何の日のかつて話だつたけど、このまま話しても私が一方的にやられそうだ
から正解を言うね」

「拗ねるなつて、頭撫でてやるから」

「ふにゃ、じゃない。正解はね、つてちょっと撫でるのは止めなくていいよ」

「わかつたよ。それで正解は？」

「恋人の日でした」

また頭の悪そうなこと言い出したよ。いや待てよ、名前だけで決めつけるのは良くないな。それに俺だって今では立派なリア充だからこういうイベントにも慣れてかないと。頑張ればそれだけ見返りがあるし。

「なにそれ？」

「あれ？ 意外と積極的だね。ハチ君なら嫌そうな顔すると思ったのに」

「昔ならそうだったかもしれないけど、今は圭萌がいるからな」

「ハチ君つてあざといよね」

「そんなことないと思うんだが・・・。それでその恋人の日つてのはなんだよ」

「えつとね、もともとはブラジルの縁結びの聖人アントニウスって人が歿したのに起因してるらしいよ」

「なるほどな」

俺はそのアントニウスさんがどれだけ素晴らしい人かわからんけど、きっと圭萌も知らないだろうからいいか。だけどこれだけ聞いてもわからないってことは、まだ世間に浸透していないのかな。

それならそれで、なんで圭萌は知ってるのかわかんないけど。

「それでなにかするのか？」

「さすがハチ君察しがいいね。えつとね、恋人同士でフォトフレームを贈り合うんだつて」

「なるほどな」

「てことで、とりあえず外出しよっか」
「そこで買うつてことだな」

* * *

俺たちは近くの家具・雑貨店に来ていた。ここは2人で何回も来ており、さつきまで

2人で座っていたソファーやもここで買ったものであつたりする。

今日の目標はフォトフレームだけどまずは2人でぶらぶらすることに。

「このお皿水玉模様がかわいいよ」

「美濃焼の丼だな。お皿も売ってるんだな」

「買つてもいいかな?」

「いいんじゃないか、確か丼なんて家にないしな」

「それじゃあ私とハチ君でお揃いね」

お皿を買ってみたり、

「そういえばそろそろ陽乃さんの誕生日だね」「へえー、そうなのか

「知らなかつたの?」

「知らないな」

「7月7日だつて」

「それならついでにここで買うか」

「私はこの前お世話になつたからそのお礼も込めて買おうかな。あ、そうだ。ハチ君の
プレゼントも私が渡しておくよ」

「そうか、ありがとな」

陽乃さんの誕生日プレゼントを選んでみたり、

「ここからは別行動ね」

「お互^いに贈るフォトフレームを買えばいいんだよな」

「そうだよ、それじゃあ30分後ね」

最後にお互いフォトフレームを買つた。ここで問題なのは俺のセンスがないってと
こなんだけど・・・

俺は恋人の日の話を聞いてから思っていたことを圭萌に聞いてみた。

「フォトフレームはお互いに買って贈るとして、中に入れる写真はどうするだ？」
「私もいろいろ考えたんだけど今回は2人で写ってる同じ写真にしようと思うんだけど

「いいかな」

「それがいいな」

よかつた。話を聞いた感じだと、俺単体の写真が必要なんじやないかと思つてたけどそんなのあるわけないからな。

「この写真を入れてきてね」

「これはこの前の」

「デートの時に撮った写真だね」

「いつの間に現像したんだ」

「ちょっと前にね。これを飾つておけばわざわざスマホ見る必要ないよ」

「なんで・・・・・」

なんで圭萌がそれを知つてるんだよ。確かに大学とか家で1人でいる時とかたまにどうしても圭萌に会いたくなつた時とかに見てたけど。凄く恥ずかしいんだけど。今世紀で1番恥ずかしい、これはマジで。なので、

* * *

「この写真を入れてくれればいいんだよな」
逃げることにしました。

その後、お互に写真を入れたフォトフレームを贈りあつた。俺の贈ったフォトフレームはたいへん喜んでくれて、寝室に置いてくれることが決まった。

そして圭萌から俺に贈られたのは、

「それはハチ君がいつでも持つて歩けるようにキーホルダー型のフォトフレームだよ。それなら大学でも見れるかと思つて」

ここまでしてくれるとなんか悪い気がしてくるな。それに俺が圭萌なしじやないと生きていけない頼りないやつっぽくなつてないか。

「それでいいんだよ。むしろそれぐらいのほうが私的には安心する」

そう言いながら圭萌は抱きしめてきた。確かに別にこのままでいいかな。俺が圭萌に依存するぐらいじゃないと結婚なんてしないほうがいいのかもしれないしな。だけど圭萌も俺と同じぐらい俺のことを必要としてくれているのか。

「大丈夫だよ。私だつてハチ君に会いたいって時なんて凄くあるんだよ。それに私だつて……」

「私だつて？」

「ほら」

「そこにあるのは圭萌から俺にくれたフォトフレームとは形の違つたものがあつた。

「私は既に持つてるんだ。今回の件だつて本当はハチ君にそれをあげるためだつたんだよ」

「そうだつたんだ。それならこれは家の鍵に付けさせてもらうよ」

「大切にしてよ」

「もちろん、それじやあ」

「それじやあ？」

「この感謝の気持ちを伝えるよ、ゆつくりね」

「それは嬉しいけどどうやつて？」

「察してくれ」